〔…五年三月十二日第三種郵便物認可〕

明治三十五年三月五日發行

女鑑

第貳百四拾八號

女鑑第二百四拾八號目錄

口繪

論說

史談

學藝

家庭

漫錄

樂園

文林

歌の庭

寄書

雜錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一册	金拾錢
六册三ヶ月分	前金五拾七錢
十二册半年分	前金壹圓拾錢
廿四册一年分	前金貳圓拾錢
全國無遞送料	

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金参拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年三月四日印刷
明治三十五年三月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊泰一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

稟告

女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

追伸

爾來各所よりの新刊新聞雜誌及圖書等の御寄贈は甚だ御手數ながら必ず**國光社出版部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

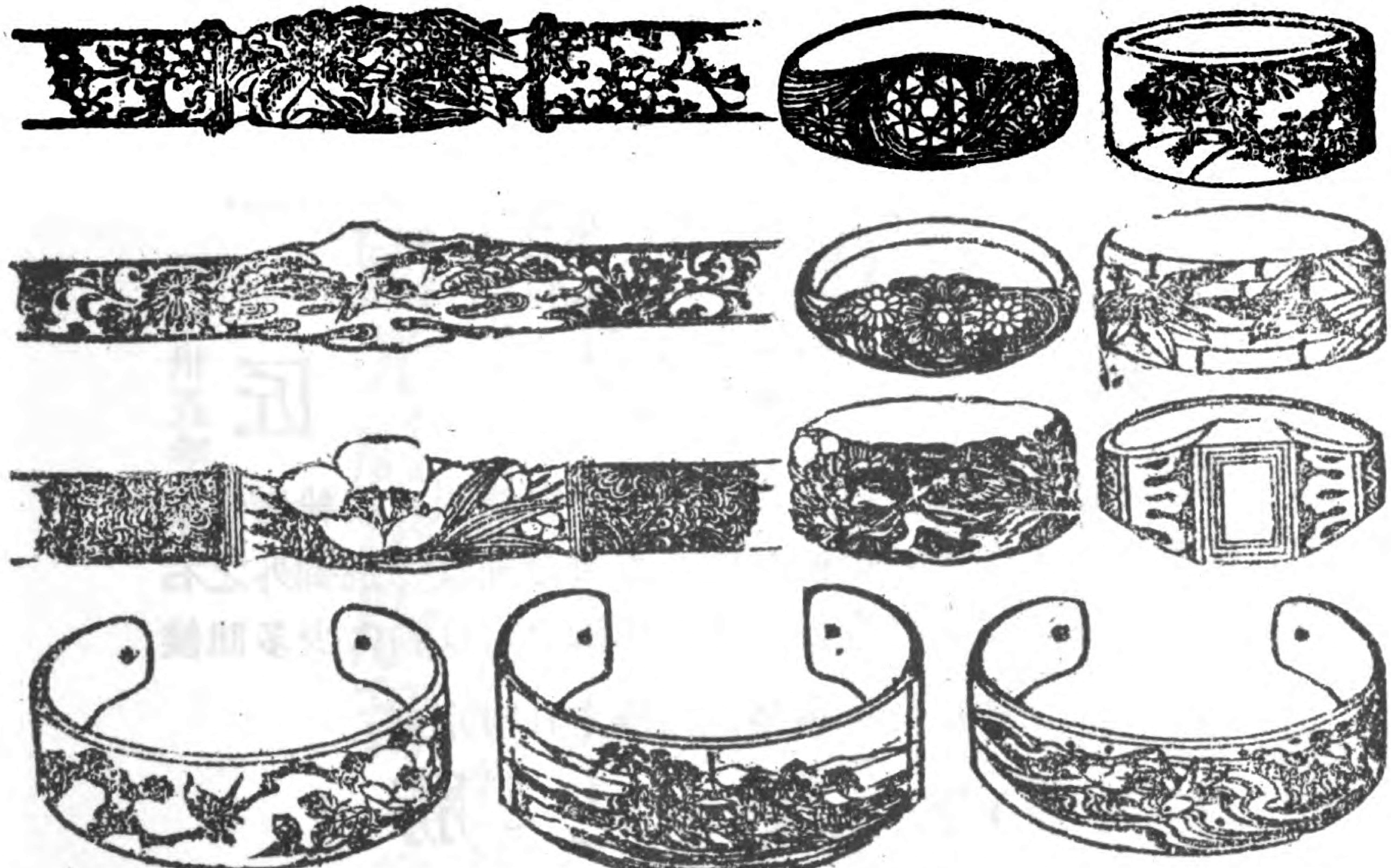
明治卅五年二月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社 **國光社出版部**

（電話特新橋八八番）
（電話新橋二二六九三番）

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價十六圓
乙價十四圓

●廿金三匁付平象眼片切彫刻付
甲價廿二圓
乙價十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價廿六圓
乙價廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價卅四圓
乙價廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價卅六圓
乙價卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價卅八圓
乙價卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價二百五十圓
乙價百八十圓
丙價百三十圓
丁價九十圓
戊價六十五圓
巳價五十圓

●廿金三匁付角形小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角形小判形無地印面指環
廿二圓四十

●廿金五匁付兩小判形無地印圓指環
廿九圓五十錢
外ニ段付模様付形状ノ種類ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金高彫相彩模様付
甲價卅五圓
乙價三十一圓
丙價廿七圓
丁價廿三圓
戊價十九圓
巳價十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價十一圓
乙價九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價十四圓五十錢
乙價十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價十九圓
乙價十七圓

●十八金三匁付蝶香付三ヶ折片切彫刻
甲價廿圓
乙價十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶香付三ヶ所平象嵌片ヶ彫刻付
甲價廿三圓
乙價廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金類の多少寳石の大小又は彫刻の繁簡等によりて代價に高低の品々あり

時計及寳玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

吉沼又右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續



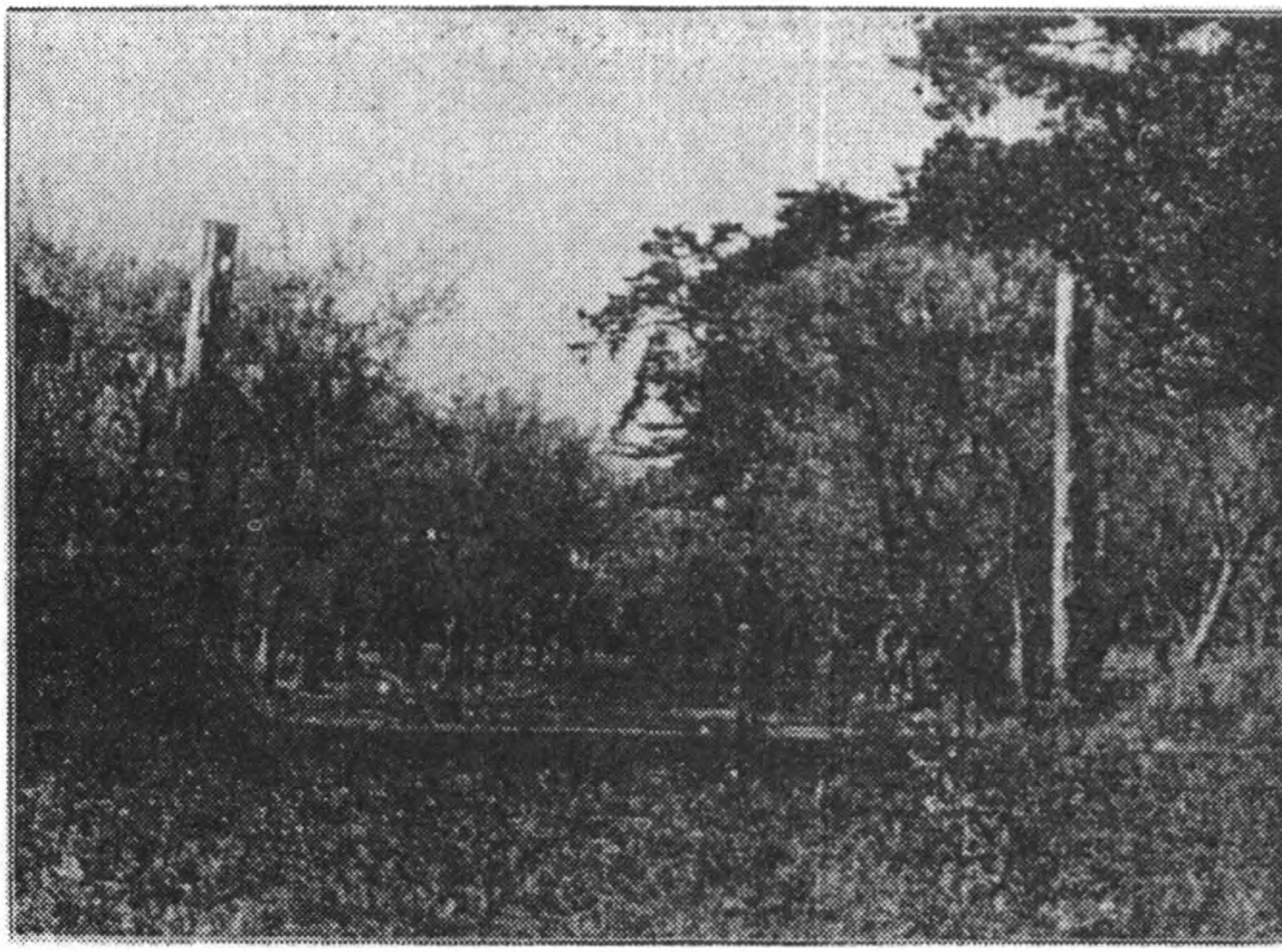
女子大學講師三輪田眞佐子刀自



女子高等師範學校教諭正七位後閑菊野子刀自



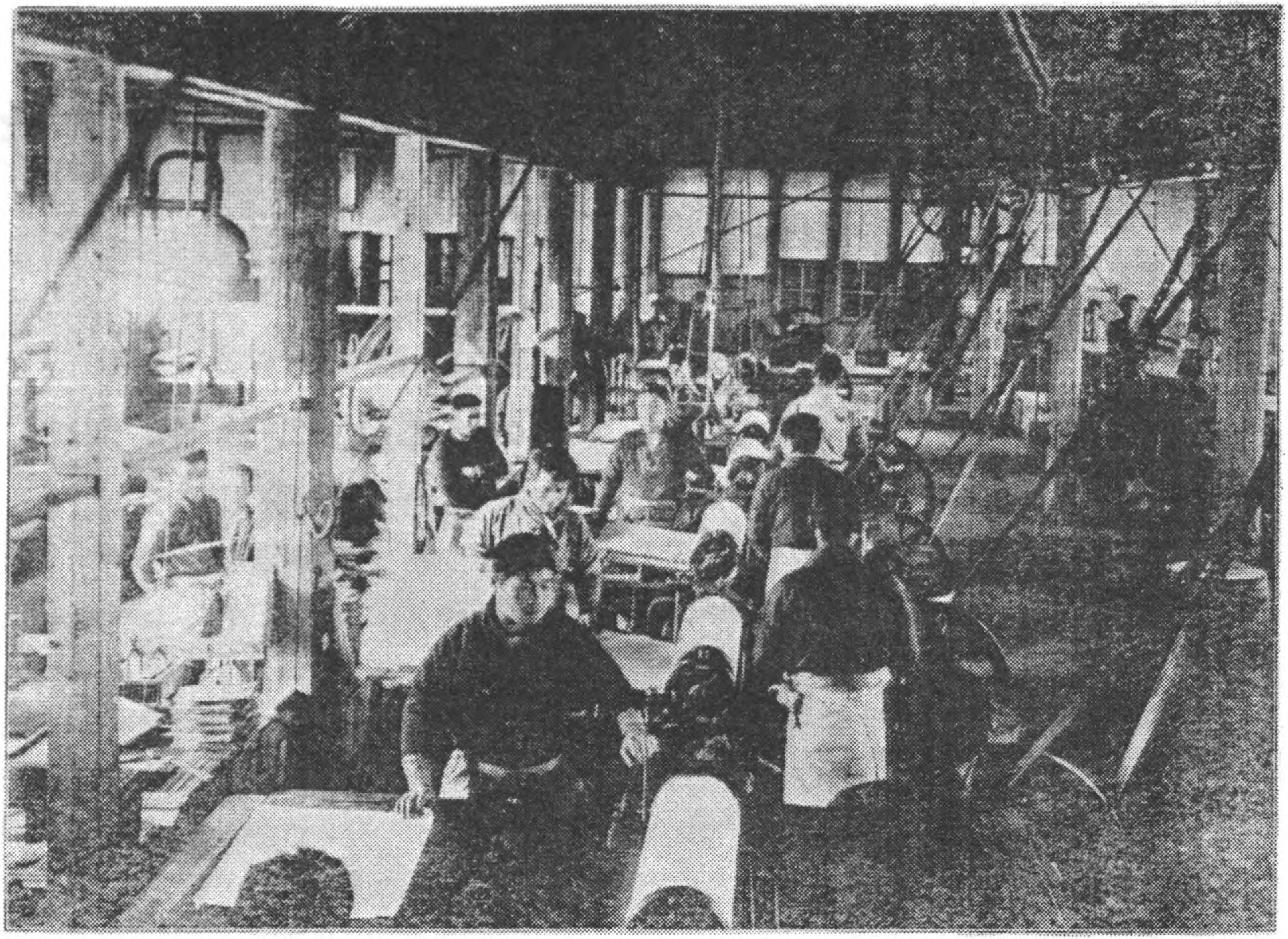
東京女學館講師秦りん子刀自



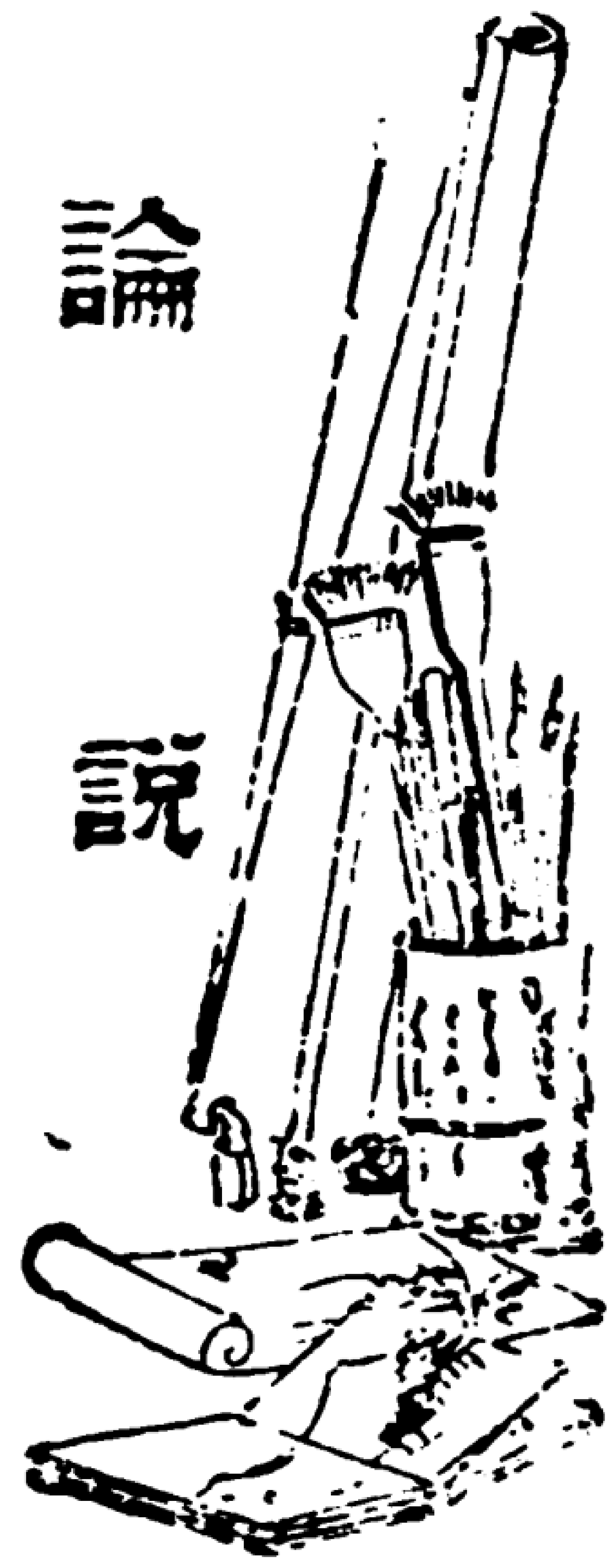
水戸偕樂園の梅



大和月ヶ瀬の梅



國光社印刷部工場内の光景



論説

我邦女子教育は如何なる主義方針に據るべきか（承前）

新潟縣高田師範學校長　阿多廣介

婦工と云ふことに就いては、昔の婦工と云へば機を織るとか、着物を縫ふとか、其から料理をするとか云ふ樣な事であつた。併し今日は、戸毎に機を織る必要もなからう。又、裁縫のことも中等以上の男子は、皆洋服を着けるわけであるから、シャツより靴下に至るまで、一々婦人の手を借る必要がない。尤も裁縫が、全然必要なしと云ふ譯ではないけれども、分業の發達するに從つて、段々裁縫に費したる婦人の勞力が減じて行く譯である。料理のことも、昔は友達や親族などに御馳走をするには、必ず自分の家で待遇を爲るのであつたけれども、今日は普通の交際に於いては、料理屋とか、ホテルとか云ふやうな所で御馳走するやうに成つて來て、一家の食事の外は、婦人の手を借る必要が少くなつて來た。して見れば婦人が、一家の家政を扶ける道と云ふものは、他の方法を設けて往かなくてはならぬことであらうと思ふ。而して其婦人の仕事としては、今日は或は看護婦とか、電話交換手とか、教育ある婦人は、段々社會が歡迎するやうになつて來たが、吾輩の考へでは、婦人に尤も適當したる仕事は、中等以上の人も、一旦

敎師となられることを望む。尋常小學校の敎師としては、婦人は尤も適當であつて、婦人の敎師は普通の女子よりも、却つて注意が周密で、親切で、勤勉で、從順であるのを認めるから、我國の尋常小學校の敎員は、主として女子に依賴したいのである。是は國家の經濟上よりも必要なことである。乃ち男子は、女子の成し得ざる所の仕事をして、女子が爲し得ることは、成る可く女子に職業を授けて置けば、國家の生產上少からざる利益が有る。又女子の方から言へば、女子と云ふものは天然の敎育家である。即ち一生の内には己れの兒童を養育し、敎育する天職を有つて居るのである。其天職を盡す上に於いて一旦敎師と成つて、敎授や管理や、訓練の道を研究して置いたならば、己れの子女の敎育、婢僕の管理等に大なる經驗を得、一家の幸福此上なきことだ。又女子は、一度は人に嫁さなくてはならぬ。嫁するに就いては、仕度も何にかの費用も少からず要する。又假令夫の家に嫁しても、一通りの小遣錢位は己れの財產として、所有して居らなければ不自由なこともあり、又輕蔑を受けることもある。其れで人に嫁する前に、一旦敎員たる資格を得て、敎師を務め、其等の報酬を貯蓄して、或は結婚費となし、或は己れの財產となし、又嫁したる上、家事の情況に由つては、敎師を繼續して往けば、其の一家の經濟上にも都合の宜いこともあらう。斯の如き際に、裁縫の如きものは分業的の仕立屋に賴み、割烹幷に子守の如きは、其等の敎育を受けたる下婢を使役すれば宜しい。斯くして、各自が分業的の業務をなすときは、單に一身一家の利益となるばかりでなく、國家經濟の上にも利益である。其れで高等女學校の敎科目には、敎育學、敎授法なども必

須科としたいのである。吾輩は前述の如き意見を以て、矢張り益軒先生の、所謂四徳を養ひたいと云ふことは固よりであるが、其の四徳を養ふ上に於いて、時世の進化に伴つて往かなくてはいかぬと云ふことを布演したいので、必しも古風の教育であるとて、排撃すべき者でなからうと思ふ。凡て如何様な聖賢の學説でも、之を祖述しなければ時世に後れると云ふことは當然である。孔子の教も今日の時世には適用せぬと云ふものあれども、必ずしも孔子は時世に係らず、其儘實行せよと云ふた譯ではあるまい。後進の者は、宜しく先輩の學術を祖述して行くことが必要である。

尚附言したいことがあるが、教師と云ふものは、一般の社會より擯斥せられて、教師自身も亦自ら己れの地位を重じない。之れは大變な間違であるのでありまして、教師程高尚なる、且又國家の基を成す上に於いて、尤も大切なる職業はないのである。是れを今日人が輕んずるのは、報酬が少ないとか、又今日教師になつて居るものが、更に無資産のものなどがあつて、品位の低いものが教師を爲すと云ふ上からして、社會の者が之を卑下する傾があるのである。吾輩の見る所にては、現今の教師が、之を職業として、乃ち己れの生活費を得る爲めに俸給を取つて、教師を勤めるものが多いのは、實に殘念である。英吉利では、教師の資格は、紳士と云ふものでなければならぬと云ふことの一ヶ條がある。其紳士と云ふものは、中産以上の資産を持ち、其上品格を持つて居る人を指すのである。乃ち教師の俸給を以つて、已れの生活に充つるやうなものは、教師たるに適せぬわけであらう。我國に於いては、然う云ふ様な譯に現在成つては居らぬが、今後可成中等以上の資産や、品

格を持つて居る人が教師を勤めて呉れたならば、教師と云ふもの丶品位も大に上つて、教育上に至大の影響を及すであらうと思ふ。吾輩曾て或雜誌記者に話したことがあるが、恐れ多くも尊き御方が軍人となられる如く、華族學校なり、何なりに於いて名許りにても訓導となり教授となりて、教鞭をお取り下されて、教師の模範を示して下さるやうなことがあつたならば、如何に教育者の品格が上つて往くだらうか。又教師の職業と云ふものは大切なものであると云ふ考を起して、立派な人が、教員となるやうに成つて往くことであらうと考へるのである。（完結）

思ひ出でたるまゝを

法學士　天野弘一

このあひだ大槻君から何か婦人に關する話をするやうにとの御頼みであつたが、何分役所の方が急しいので、とても、これというてまとまつた御話は、出來ないといふて、御斷りをして置いたが、別段まとまつたものでなくとも、何か思ひついたことでよろしいと、いふことであつたから、そんなら、其中何か御話しやうといふて居る折柄、つひ二三日前婦人に關する實際問題として、一寸私の感じたことがある。それを今日は御話して見やうと思ふ。先づ題を下せば「今や日本の婦人は大に人權を侵害せられて居る」とでもいはうか。即ち今日は、婦人に關する人權問題を御話するのである。

ずて、人權とは何ぞといふやかましい議論は暫く置て、之を廣く解して、吾人が社交上當然に爲し得る自由といふことまで込めていふ時は、それこそ日本の婦人は、どの位所謂人權侵害をせられて居るか知れやしない。

けふは、私は、日本の婦人の中、特に或る高等の教育を授くる女學校に收容せられつゝある學生が、それこそ、本統の人權侵害を、而かも學校から、せられて居るといふ一例を、御話しやうと思ふ。

つひ此間の事であつたが、私が或る女學校の寄宿舍に居る學生の許へ、葉書を出したら、いくら待つてゐても返事が來ない。どうも日本人はこれだから困るというて、早速に通信の貴重なることわりを書き送つてやつたら、それと行違に返事が來たやうな始末さ。どうも變だと思ふて、段々聞いて見ると、いやどうも唯だあきれる許りである。

此學校では、學生へ信書が來ると、先づ門番の所へ半日分位ためて置いて、一度に各寮に配るのであるそうな。それもまだ宜しいとして、扨て愈々寮へ持つて行くと、各寮の寮監と云ふものが、先づ、ずうつと一ぺん目を通す。(尤も封書を開披するやうな事はあるまいけれど) 扨てそれからでなければ、宛名人へは、渡さぬことになつて居るのだそうな。又學生の方より發信する時も其通り、此等の者に覽られ、留められてからでなければ、愈々ポストへはうり込まるゝといふ段には、至らないのである。なんと、あきれ返らずには、居られないではないか。謂はゝ丸で囚徒扱だね。監獄に收容せられて居る囚徒の發信又は受信の際は、必ず典獄が之を檢閲する。女學校に收容せられて居る學生の發信又は受信の際は、必ず寮監が之を

檢閱するといふに至つては、當然囚徒＝女學生女學生＝囚徒といふ代數式が、立てたくなるじやないか。成程吾が監獄則第三十四條には「囚人及懲治人の發する信書又は外人より送り來る信書は典獄之を檢閱す可し」といふ明文がある。然しながら、吾輩は未だ嘗て法律を以て女學校の管理者に、學生の信書閲覽權を與へたることを聞かぬ。抑〻吾神聖なる大日本帝國憲法第二十六條には、如何なる明文があるか。「日本臣民は法律に定めたる場合を除く外信書の秘密を侵さるゝことなし」と規定せられて居るではないか。して見れば彼の女學校の管理者たる者の行爲は、明かに憲法の精神に違背し、人權を侵害するの甚だしいものである、と斷定しなければならぬ。そこへ行つては實に、權利思想に乏しいといふものは、なさけないものだ。其れが何も別に人權を侵害してやらうのなんのといつて、することではなし、寧ろどつちかといへば、人の爲めを思うてすることであらう。又せられる者もせられる者だ。ちやあんと、あきらめて居る。さ、それが困るといふのだ。孟子がいうて居るじやないか。人は自分で自分を侮ればこそ、遂に他人から侮られるやうになるのであると、なんと、名言ではないか。之を吾輩の專門語を以て、其まゝ言ひ換ふるときは、人は自ら權利思想を欠いて居るから、他人の爲めに權利を侵害せられるのである、といふことになる。實に其通りだらうと思ふ。今や日本の婦人は、自分で自分を侮つて居るから遂に他人から侮られて居るのである。自分で自分を賤むで居るから、社會から輕蔑せられて居るのである。自ら權利思想を缺て居るから他人から、權利を侵害せられて居るのである。そうなると、茲に因果の關係を生じて來

て常に他人から權利を侵害せられつけて居るから從つて、いつのまにか權利思想の程度が墮落してしまひ、社會から常に輕蔑せられて甘んじて居るから、遂に益々卑しい根性となり、他人から侮られてだまつてゐるから、愈々益々自分で自分がなさけなくなるのである。此の如きを因果の關係といふ。さ、此の因果の關係になつたら往生だ。丁度金を借りて、利に利が付くやうなもので、いつまでたつても返せるものでない。それには初から金などを借りないがよい。金を借りるのは、家計が紊亂するからである。(少しく極端だけれど)家計が紊亂するのは、一身の計其宜しきを得ないからである。一身の計其宜しきを得ないのは、抑自分がやくざであるからである。みんな身から出るさびだ。孟子曰く人必自侮而後人侮之と、なんと名言ではないか。それは成程侮る者も

惡るい。社會の制度も決して完全とはいへまい。從つて自然と婦人が劣等の地位に立たざるを得ないやうなわけになるのであるが、其れは又其れとして、別に自ら之が改良の任に當る專門家があるから、其人達に任すとして、ともかく今の所、世の婦女子たるものは、大に自ら重んずるの德性を涵養してもらひたい。自ら重んずるの德性を涵養するが爲めには、則ち人權の重んず可きことを覺知するに如くはない。人權の重んず可きことを知らないから、從つて其侵す可からず、侵さる可からざることを知らないのである。私はとうに此事に氣が付いて居つたから、一二年前、吾が帝國憲法を通俗に解說して、國民敎育の一端として、先づ故鄕の女小供に授けたことがある。其中に丁度今御話した信書の不可侵のことも載つて居るから、今之を示すことにしやう。此は讀本體に書い

たのであるから、第一課第二課と課を逐うてある。信書の不可侵は第何課にあつて居つたか知らんが、先づ、

信書の不可侵

頃しも春の半とて、鳥は樂しくうた謠ひ、花は盛りに咲き亂れ、いと長閑なる日曜日なりけり。松子は此日外出もせず、朝から獨りおのが室に在りて、讀書に餘念なかりしに、偶々門口に訪なふものあり。つと立ちて出で迎ふれば、日頃懇意なる餘所の下女が、一通の文を携へて來れるなりけり。下女は恭しく一禮して、さていふ樣、「今日は誠に美しいお天氣で結構なことで御座ります。手前は宅のお嬢樣から、竹子樣へ差し上げる御手紙を持つて上りましたので御座りますが、お嬢樣は早どこぞへ、御出ましで御座りませうか。」と松子は慇懃に答ふる樣、「それはそれは、御苦勞で御座りました。折角で御ざりますが、竹子は折惡しく只今不在で御ざりますが、つひ近所まで買物に參りましたので御ざりますから、其中戻るで御座りませう。お差し置き遊ばしても御宜しいので御座りませば、私が御預り申上げて、竹子が戻り次第に申傳へることに致しませう。」と、斯くて松子は此文を受け取り、やがて針仕事爲せる母の許にひざまづきて、「おかあ樣只今梅子樣から竹子の許に、御使で御文が參りました。」母「そうかえ、わざ〳〵御使で、それはそれは御奇特な。そしてお前は先樣へ何と申し上げたえ。」松子「お置き遊ばしても御宜しいのなら、私が御預り申上げて、おきますと申上げましたら、宜しいとおつしやりました。」母「そうかえ、それなら宜しう御坐ります。別にお急

ぎの御用でもおありなさらんのだらうが、竹子が歸つたら直ぐに見せなくてはいけませんよ。」松子「かしこまりました。おかあ樣餘計な事では御坐りますが、私は御文の御用を大低察しまするに、先はお二人で御話するには此頃は天氣が朗かで、散歩には誠によい時候で御坐りますから、其中私も連れて、三人で動物園と博物館に行つて見ませうと、いうてで御坐りましたから、多分今日は其おさそひだらうと存じます。」母「そうかえ、そんなら、けふは其おさそひだらう。竹子は早く歸ればよいに、梅子樣はさぞかし、御待ちわびてゐらつしやるだらうものを。」松子「おかあ樣、それとも、何か別の御用かも知れませんから、ちよいと開いて讀んで見ませうか。」母「何をいふのだえ、お前は、そりやお前飛んだことだよ。お前は、學校はよく出來るが、まだ御手紙といふものゝ大切なてとをよく辨へて居らぬと見へる。今日はかあ樣が、其事を御話してあげるから、よく御聽きなさへ。」と、母は仕事を止めて形を正し、「凡そ信書というて、御葉書とか電信とか御手紙とかいふものは、人樣が御話する代りに、やり取りなさる大切なる書き附である。だから人樣が自由に御話するのを、わきから遮ることが出來ないのと同じ樣に、人樣の御手紙や何かを、他人が粗末にすることは、決して出來ません。又人樣の御話するのを、わきから竊かにうかがうては、ならぬのと同じ樣に、人樣のやり取りなさる御手紙や何か[illegible]他人が開いて見るといふことは、決して許しませぬ。中にどの樣な内證なことが、書いてあるかも知れませぬ。それであるから、たとひどの樣な御懇意な御方から、御つかはしになつたのでも、人樣へあてた信書といふものは、決して見るものではあり

ませんよ。それは、親子兄弟の中でも同じことでありますが、御葉書は封がしてないからというて、之を讀んで宜しいといふことは、決してない。まして、封じてある御手紙や電信は、其中にどの樣な秘密なことが書いてあるかも知れやしない。だから、御上でさへも、吾々下々の信書を、御讀みになるといふことは、それは〳〵、よく〳〵の時でなければ、なさらないのである。法律といふものに、かういふ時には讀んでもよいと限られてある時の外は、たとひ吾々下々の信書たりとも、決してお讀みになることは、出來ないのだよ。今、かお樣が、此事を仰せられてある、吾大日本帝國憲法のおきてを、讀んで御きかせするから、謹んで御聽きなさい。よく覺えて、決して忘れてはなりませんよ。

大日本帝國憲法第二十六條

日本臣民は法律に定めたる場合を除く外信書の秘密を侵さるゝことなし

よく分りましたか。信書といふものは、これ程大切なものでありますよ。だから此御手紙も大事にしておいて、竹子が歸つたら直ぐに渡さなくてはなりませんよ。」と、松子は今母より此大切なることわりを教訓せられ、いと。感じたる如くにて、母に對つて一禮し、「おかゝ樣、おかげさまで私は、只今こそ、日本臣民として、常に心得ねばならぬ、大切なおきてを覺えました。これからは、深く此事を心にとめて、決してそゝうを致しませぬ。有りがたう御座りました。」と、謝する程なく竹子は、用事はてゝ歸り來り、母の前にひざまづきて、只今歸りぬる旨をあいさつすれは、姉は直ちに件の文を見せつ。果せるかな、散歩誘引の文なりければ、姉妹は共に母の許を乞ひ受け輕裝して恭しく

く母の前に一禮し、むつまじく手を取り合うて梅子の許を訪ひ、程なく三人して上野へ向うて出で行きけり。道すがら松子は今母より教訓せられぬる大切なることわりを懇ろに二人に說き聞かする程に、いつしか三人は公園の花かげに着きてけり。」

まアこんなあんばいにして、人權の重んず可き觀念を小供の折からつぎ込むだら、いまに大きくなつて人の權利を侵害するやうな國民は出來まいと思ふが、果してどうか。何をいふにも忙しいので、まだ此讀本を完結することが出來ないのは如何にも殘念である。

女

女子大學講師　戸川殘花氏演說

私は女と云ふことに付いて考へて居ることがありまする、併し單に女と申せば餘り題が濶過ますから何を申上ても題の趣意に合ふやうになりますが、私はご案內でありませうが現今女學校に關係して居りまするので、婦人の事に就きましては折く頭を痛むることがございます、此女と申す字に就いて最初に考へて見ましたが(西洋の事は暫く措きまして)支那の女と云ふ字でございます、昨日字典で調べて見まするとさま樣々なことが書いてございますが、一口に「女」と云ひますのは古い文章で……所謂古文では「汝」と云ふ字と同じに用ゐられて居ります、即ち女と汝と云ふ字は同じ音の汝と云ふ字に用ゐられて居ります、其處を考へますると支那では古へ男女に餘り隔てはなかつたものであらうと思ひます、即ち女は相對する時に用ゐる言辭であるから支那の古代に於ては、男女の間に於て男が先で其次に女であ

ると云ふ差別の有つたのではないやうでございます、又日本では「をみな」と云ふ字訓がございます、是も又男女の差別がなかつた證據であらうと思ふ、即ち「をみな」の「を」の音は「をとなしい」とか「尾花」とか「小萩」とか申すやうな「を」の字と同じとでございます、又「み」は身體の「身」でございます、「な」は「なる」と云ふ字でございますから、此字訓に就て考へましても何うも男女の間に差別はございませぬ、又彼古事記を御覧になれば伊弉諾伊弉冊尊の當時の御言詞遣を見ましても男女の差別は見出さぬのでございます、然るに今日になりましては、此女と云ふものは、明らさまに申上ると、何うも男よりは落ちて居るやうでございます、先づ一例を卑近に申せば、女と云ふ言詞を、女子供と一口に申しませう、謂はゞ女、子供は數に這入らないです、女、子供は役に立たないのです、夫から又只今から五十年程前でございますが徳川時代には、女に坊主に子供に醫者でございます、此四つは人間の部類に數へられぬやうになつた、ご承知でもございませうが 古 は白半襟を掛けるは五位以上でなければ許しませぬ所が坊主と女は一向差閊が無い、其れでは坊主と女は社會の上流であるかと云ふと 然うでは無い 是は論外である、坊主の事を方外に見て女は世外に見たとか申します、兎も角方外とか世外とか云つて人間の仲間に入れなかつたやうです、故に女は白半襟を掛けやうとも如何なる扮粧をしやうとも制度に問はれぬのでございます、それから又「め〻しい」と云ふ言詞がある、是は何やら氣力の無い只感情にばかり走る意思の弱い、物の役に立たないと云ふ人を言ひ顯はすに用ゐて居る、尙又男の腐つたやうなとは云ひませぬが、女の腐つたやうなとは能

く申して居ります、斯様に女と云ふ者は輕蔑されて居つたものでございます、

所で明治の世にありまして近來は多くの文學者の仲間などには、あの人は女性的であると云ふ言詞を遣ひます、女らしいと女性的とは大變違ふ、頭をピカ〳〵させて衣紋ばかり氣にして居るやうな人は女らしいと言ひ、彼人は餘程文學的の天才ある人で、どうも女性的の人である、新體詩なども上手であるなど〻云ふと大分女性的が立派に成つて來る、さうすると「女」又は「女」と云ふ字は餘り關係はない……言辭に關係がなく、矢張時勢に依りて第一の意味を與へ第二の意味を與へ第三の意味を與へるやうになつて來るのであります、同じ言詞でも時代に依つて變化があるものと考へられます、そこで女と云ふものを日本の歷史で見ますと果して賤しいものであらうか、力の無いものであらうか、又明治になつて只今は上るやうな按排に女と云ふ言詞遣の上に於て品格の上がりましたのは、是は全く海外から輸入された思想であらうかと考へまするに決して然うでない、日本の歷史を繙いて古へに溯つて見るに、女は皆豪いのです、男よりも豪いのです、其れは何故かと云ふと、我國の歷史に於ては　一番始まりの天照大神は男じやありませぬ女です、女を始めから吾々の司として吾々の　天皇陛下として仰ぎました、其れから藤原氏の盛であつた頃や、近江の都や、奈良の都の御歷代には賢明なる女帝が澤山在せらるるのでございます、推古天皇孝謙天皇のやうな御聰明な御方があります、其れに神功皇后の如きお方は取上げて申上げるまでもあい、其れでは其の後の日本人は何か他の者の血を混ぜて居るかと云ふに決して然うではない、凡そ世界中お互の血は

ど純粹無垢の血はありませぬ、吾々は昔から少しも他國と混雜いたして居らぬのでございます、其れは成程支那人の血とか、三韓人の血とか云ふもの丶多少は混じて居りませうが……併し昔しの御歷代の內に聰明叡智に渡らせられる女帝がお在したあらば畏れ多くも其御血統を引て居らるのでありますから、日本の婦人は力がないものと斷定することは出來ないので御座います、藤原時代になりまして女の有樣は何うであるかと云ふて見れば紫式部であるとか清少納言であるとか何れも非常の才女子である、日本には國學者、國文學者と云ふ者は澤山にございますが、それ等の人は何を以て金科玉條として仰いで居るかと云ふと紫式部の書いた源氏物語であります、彼の如き書物は男は書いて居らぬのであります、其次に隨筆の親方と言はれて居るのは清少納言の枕の草紙でございます、紫式部の源氏物語、清少納言の枕の草紙の如きものは實に二寶典と云ふても宜しうございます、此二寶典は誰が書いたのであらうか實に是は貴女方のやうな纖弱き御手から成つたものであります、であるから今斯うやつて此式に御出での澤山の人の中には紫式部の血を別けた人も在しやるに違ひあい、又清少納言の血を別けた方も御在にあるに相違ない、今こそ顯はれぬが一朝機を得ましたならば此中から續々紫式部や清少納言が顯はれて來ることは私は斷言して憚りませぬ、保元の亂前までは婦人は文學上に非常な勢力があつたと云ふことが明かでありませう、其他歌詠の第一流には小野小町の如きもある、其等から奈良平安兩朝の歷史を調べますると宗敎にも政治にも文學にも實業にも敎育にも百般の事に涉つて日本の婦人は實力を與へて居つたものであります、

所が悲しいかな、保元の亂から後藤原氏の勢が衰へまして其以後の婦人には奈良朝前後の樣な力がない、活氣がないのであります、是には樣々な原因がございますが先づ一番に歸する所は武士的思想と云ふものが案外に婦人を壓したかも知れませぬ、全體此鎌倉時代、北條時代の宗教と云ふものは御承知の通り禪でございます其前の宗教は天臺、眞言で、彼の空海の眞言宗、最澄の天臺宗でございます、併し武家時代に至ては今言つた禪宗でございます、禪宗と云ふものは頗る直截簡決な宗教でございまして、われ程武士と云ふものに仲の好く成り易いものはございませぬ、能く人が申します佛光禪師と云ふ坊さんが頸を斬られやうと云ふ時分に何を言たかと云ふと珍重、帶佩三尺劍、電光影裏斬春風…で何う云ふ意味かと云ふと頸を斬らせるには先づ彼の持つたる三尺の劍を珍重し祝して居ります、而して電光の裏に春風を斬るやうなものであると云ふ實に時世を脫却したやうな樣であります、成程武士的思想には能く適したものである、尚ほ太平記を御讀みになりましたならば分りますが、北條氏滅亡の時高時始め一族が順々に腹を切るに甲が自分の腸を掴み出して斯う云ふ肴を献ずると云ふと乙は斯ふ云ふ好下物があるのに酒を飲まずには居られぬと言ふて酒を飲んでは其先生が腹を切り其次の先生へ斯ふ云ふ物があると腸を出して與へる、それを見た者が又酒を飲んで腹を斬る、と云ふ何うも無雜作な話ではございませぬか、然し是は幾分か禪の感化が此中にございませうと思ひます、どうも實に未練のない奇麗な……跡に少しも塵も汚れもない、武士的思想は是に依つて養はれたものであらうと思ひます、然し斯う云ふ先生が家へ歸つては妻君に

向つて今日は寒いからお前は炬燵へ這つて居れ、お前の好きな物を今日は買つて來たよなど、申しませうか、それは決して言ひますまい、外に居る時も家へ歸つて來ても怖い顏をして居る、然しながら怖い顏はしても決して腹を立つて居るのじやない、勤めて怖い顏をして居るのであります、それですから妻君が所天此反物を買つてようございませうかと言へば欲しけりや買へとそれはたつた一言である、是が足りないから所天どういたしましやうと言へば、足りぬものは仕方がない何うでも勝手にしろと總ての事を飲込んで居るのです、其處は能く御了解を願ひたい、武士には憐れがなくちやならぬ、其情も飲込んで居る中に憐かあつた、ヲイ〳〵泣いてハンケチを濡らして同情を人に顯はすのは武士の常ではないのです、寧ろ涙を奥歯で嚙碎いて居るのです、それでも外には顯はさないのが武士の家庭でございませう、是は德川の頃もさうでございましたが、此武士的思想の爲に婦人は壓せられ、十分なる光を放つことが出來なかつたのである、

そこで再び元に戻りましてお話を致しますが、源氏物語も平家物語も實に皆さまの前でお話の出來難い處があるのでございます、アノ時分の宮中は申すも畏れ多いことでございますが、先づ唯今の遊廓の樣なものでございまして、公卿や其お姫樣などの劣等なる戀愛の競爭場でございます、掃溜でございました、然るに此戀愛の掃溜が好い工合に化學作用を起して、アヽ云ふ結構な書物が出て來たのでございます、けれども倫理として一文の價値もございませぬ、さう云ふものを鎌倉武士の家庭に何うして用ゐられませうか、決して武士の妻や娘には讀ませなかつたでせう、其歌人の歌に

も戀歌などは秀逸なのが澤山あるのでございますが、何うもそれ等の者を讀ませては武士的家庭が纏りが附きませぬ、先づ斯う云ふ事は鐵漿を塗附けて眉毛を剃つた京都の公卿方へお讓申上げて鎌倉武士と云ふものは一向然う云ふ事は見返りませぬでした

夫れから凡て優勝劣敗は免れぬ數でございますから左あくとも男子の方が女子よりは力量が強い、それであるから勢ひ男は女を壓するやうになります、所で女は物に頼る、物を憐むと云ふ麗しい思想を持て居るのです、それですから鎌倉時代には婦人を代表するやうな人は少ないのであります、袈裟御前の如き遠藤武者盛遠の爲めに首を斬れてしまつた、一方から考へれば愚な話しです、斯う云うやうに積極的の勇氣が無い、稍々吾々の心を强うするに足る婦人は鎌倉時代に平の政子が一人居つた、此平政子と云ふは如何にも奸佞邪智の婦人のやうに思ふでございませうが、アノ時の時勢を考へまするど、所夫の頼朝は死にまして自分の子の頼家は未だ襁褓の内にあつて、一方は北條氏が漸く權威の募る場合であります、そこで簾を下して尼將軍と自稱は致しますまいが、天下の執權者として仰がれて、鎌倉を抑へて居つた政子の技倆と云ふものは實に敬服の外はございませぬ、又諸君は學校で御學びで御座いませうが彼の松下禪尼は障子の切張りを教へた、障子の切張りも結構なことでございますが、も少と氣の利いたことで致し樣があつたかも知れませぬ、それ故に私は政子一人豪らへ婦人だと推すのでございます、それから織豊二氏とありまするど矢張戰國時代でございますから私共の所に彼の時分の舊記がございますがそれを見ると女のすることがないので

唯鐵砲の彈丸ばかりを鑄つて居る、昨日は誰が死んだ今日は誰さんが死んだと云ふ櫓に籠つてそんな噂をしては鐵砲の彈丸ばかりを鑄つて居つた軍の摸樣所ではないと書いてある、成ほどさうでございませう、戰國であつたなれば婦人は勢ひ兵站部の方へ廻つて糒を拵へるとか病人の療治でもするか、其位のもので暇さへあれば鐵砲の彈丸でも鑄るより外に仕方がない（つゞき）



三輪田眞佐子刀自の畧傳

三輪田眞佐子刀自は、紙上に於て殆ど十年讀者と相親むが故に、其の主義と見識との如何なるかは、茲に蛇足を加ふるに及ばじ。而も功蹟の絶大なる、讀者は反りて其の來歷を知らんと欲すること切なるべし。然るに刀自は、自ら過去の功に誇るを好まず、從つて何事をも言はざれば、其の詳細を知るに由なきのみならず、種々の境遇を經、種々の事變に接し、亦幼少より今日まで學事と教育とに關係せしを以て、此等を逐一記載するは困難なるにより、唯其の大略のみを述べむ。

刀自は、弘化元年一月一日を以て京都に生る。雅號梅野女史と稱す。故從四位宇田淵氏の息女なり。父は梁川星巖の門人なりしかば、刀自幼より文學に志し、亦陽明の學派を汲むに至りぬ。蓋し刀自の天稟非凡なりけん。十二三歲のころ、既に四書五經に通じ、亦詩文をも能くせり。今其の學問の源泉をたづぬるに、星巖及、其の婦人紅蘭女史より詩と書とを學び、亦知光院殿並に粟田宮殿下

に就き漢籍を修め、松苗博士にも講義を聞き、高橋武之に和歌を習ひき。但し其の學問上の根本は屋巖に出で、品性上の感化は紅蘭女史より來りしは明かなり。

斯くして幼少より學問才藝人に秀でしかば、當時の學者間に珍重せられ、令聞四方に渡る。然れども刀自は、尚小成に安んずるを好まず、大に學ばんとて、一日同門の先輩者なる岡本黄石氏に謀り、われは女子ながら江戸に上り、聖堂に入ることを請願せんと、時に黄石氏も其の奇特に感じ、周旋の勞を取らんと約せしが、故ありて果さざりしと言ふ。以て刀自が好學の一斑を知るに足らんか。斯く令聞高きより、岩倉輔相公は、卓見の人傑なれば以て我の家庭敎育を托すべしとなし、直に刀自を引きて大に信任せり。これより刀自は岩倉家にあること前三年、遂に明治維新に際し、當時の勤王家伊豫松山の藩士三輪田元綱氏に嫁す。其の嫁資一切は岩倉家より下賜せりとぞ。思ふに刀自が敎育に從事せしは、昨今に始まりしにあらざるを知ると共に、いかに人を敎育するの技能を有せしかを知るべし。既に嫁するに當り、良人は思ふやう、吾は机を持參するものを娶らずと。其の意は、家政を主とせん事を言ふならん。果して刀自は單に學者のみにあらず、良人に對しては從順にして琴瑟相和し、家政を主ること甚だ巧に、よく一家を整理す、間もなく良人は、外務權大丞に轉任し、さあきだに有志の常として交際多きものを、況して斯る官にあるを以て復雜を極めて、家政を治むるは容易にあらざるべし。後に良人官を辭し、病に罹り、數年癒えず、遂に明治十一年郷里に歸りて沒す。刀自のこれに事へし貞操と懇篤は、殆ど筆紙に盡し難し。之に加ふるに、僅に四才ばかりの男

兒を遺す外、何物をも遺さゞりしと言へり。

良人の死後その郷里にあるや、なほ刀自の齢若きからに、親戚皆再縁を勸むるも、刀自は固く拒みぬ。衆皆其の如何に身を處するかを危まざるはなし。時に刀自は四五歳の小兒をつれ、松山城下に出で、教授を始む。忽にして其の膝下に集まるもの甚だ多し。此を擴張せしものは、刀自の明倫學舍是也。其の頃は、未だ女子の教育機關あらざる時代なれば、門生は殆ど男子のみなり、實に女子にして男子の門人多きは他に類なかるべし。此より刀自の名聲日に加はる。縣令これを知り、刀自に委托するに令女令息を以てし、なほ師範學校の教訓をも囑托したりき。

併し令息元孝氏漸々長ずるを以て、これを教育せんため、刀自は再び出京して、翠松學舍を起す。亦門人の集るもの多し。然るに天道是か非か、柱と頼みし元孝氏は、中學を卒業し、農林學校入學受驗の中途、脚氣病のため俄に死す。あゝその悲歎思ひやるべし。此より刀自は愈々全く孤獨の身となり、唯舊來の家塾を守り、教育を以て最も樂しきものとなす。次いで、村岡博士の校長たる頃、東京音樂學校の文學講義を囑托せられ、亦東京府高等女學校に於ても、岡松甕谷翁の辭するに當り、刀自を推してこれに代はらしめ、今や女子大學校の教授を始め、東京市第一第二女子技藝學校等、五六の女學校に教鞭を取り、且つ家塾も常に滿員なる程盛なりと聞く。なほ其の傍ら、松平伯爵家等一二の名望家より、刀自を聘して講筵を開き、亦細川潤二郎氏、伊澤修二氏の如き教育家の令女も、悉く刀自の自宅講義を聞き、或は家塾に入るものありと。其門下より人物輩出して、賢母良妻の聞えあるもの頗る多し。

更に其の婦人社會に用ゐらるゝため、婦人聯合會、日本弘道會、大日本婦人教育會、婦人衛生會、愛國婦人會等を始め、殆ど婦人會に關係なきものはなし。亦大日本女學會、言文一致會、女服改良會帝國教育會、東京市教育會等、學術風俗若しくは教育等のため、盡力怠らざるは世人の知る處、女子教育今日の盛況を來したるも、又偶然にあらざるなり。且著述に於いては、女子教育論、梅野女史詩文集、女子の本分、女子高等書簡文、女子處世論、女子家事訓、女子教育要言　女訓斷片等頗る多く、其の他、種々の雜誌に寄書する事擧げて數ふべからず。女子の門生を見るや一視同仁主義を取る。故に貧なきものも、刀自に助けられて立身せしもの少からず、

かくて刀自の家庭は、和氣藹然として寛に流れず、酷に失せず、よくその中庸を得て、禮を重じ、婢僕に至るまで、皆これに心服して、その風を仰がざるはなし。刀自は元孝氏の死するに及び他人の子、元道氏を貰ひてこれを教育し、文學士となし、今や大學院にて研學中なりと。これ全く刀自の奬勵に由らずんば能はざる也。

要するに、刀自は名家の家庭に生れ、種々の變遷に接し、凡ての辛苦を忍び、或は令女たる時代あり、妻たる時代あり、母たる時代あり、或は名家の家庭教育を托せらるゝあり、私立學校を起すあり、官立學校に勤むるあり、幼にして漢學と國文とを學び、嫁して良人より皇學を受け、更に時勢と相推移して洋學をも窺ふ。是を以て浮薄に流れず、亦頑固に失せず、一種特有の主義を立てゝ、教育に從事す。是、先天的その技能あるが上に、精神的學殖の深き結果に外ならざるべし。畢竟刀自は、古今百科の學に通曉し、高尚なる理想を抱きて、

慥に之を實行するものあり。茫々三千載稀代の閨秀、昭代の女傑といふも、豈敢て過言ならむや。今年五十八歳、なほ老いたりと言ふべからず、否老いて益壯にして、女德の修養を以て自ら任ずと言ふ。記者は讀者と共にその健全を祈る。

故英國女皇ヴィクトリヤの傳（承前）

宮館さだ子

女皇の家庭

女皇は毎朝八時に寢殿を出でさせ給ひ皇婿と相携へて後園に倘佯すること一時間位にして入りて朝餐の卓に就かせ給ふ、「ウインヅル」の庭苑梢頭の露尙未だ圓かなるの時殘靄を逐ふて彼處此處に緩歩を試みさせ給ふ事は女皇の最も樂とする所

にして崩御前二週間までは一日として廢することあらざりき、食後再び庭苑を緩歩せられたる後、書信の閲讀應酬幷に其他日常の用務に餘念なく從事せられ、午後二時には晝餐を了り、それより時の總理大臣に謁見を賜ひて親しく政務を覽そなはし給ひたる後或は馬に跨り或は車を驅りて、ほど良き運動を取らせ給ふ、晩餐は午後八時を定刻とせり、晩餐後には各種の社交的會合を催ふされ歡晤靄然として深更に及ぶこと稀ならざりき、此夜會こそは實に當時交際社會の皆な仰いで摸範とするものなりき。

皇婿及び女皇は共に音樂及び美術の嗜好に富ませられ、皇婿は「オルガン」の妙手として幷に時人として、女皇は「ピヤノ」の妙手として共に當代の名家メンデルゾン氏の推稱措かざる所なりき、亦た繪畫は皇婿及び女皇の最も嗜む所にして從つて造

詣するところ浅からざりき、蓋し英國中流の士女に對して美術的思想を普及し涵養せしめたるものは皇婿晩年の苦心與りて最も力ある也。

「オスボルン」及び「バルモラー」の兩離宮は女皇の家庭的生活の中心地にして「シント、ゼームス」「ウインザル」幷に「バッキムガム」宮は女皇の公生涯に對して寧ろ密接の關係を有するものなりき。

「オスボルン」宮には「スウイス」小舍と稱するものあり、植物園、博物館、割烹所、貯肉場幷に花園等の設ありて皇兒等をして之に依りて日常家政上の取扱を會得せしむるが爲め女皇の實地教育的考案に據り特に設立せられたるものなりき、皇兒等は此處に各自の家庭を組織し自から食物等を調理し兩親を招待して只管其賞賛を得んことを競ひたりき。

「バルモラー」は女皇及び皇婿の最も愛好せられたる離宮にして「デー」河の長流は帯の如くに其下を繞り田園萬里の景下瞰して一眸の中に收むることを得、此處に皇兒等は自由に其近隣の農民に接觸し一は下情に通ずると共に一は同情愛憐の念を喚起せしむるに力を用ゐ給へり。

皇兒の發育に關しては女皇は常に一定の主義を持し給ひたりき、女皇及び皇婿の信任最も厚く「バーマーストン」卿の「余の生涯中初めて見ることを得たる唯一公正の人」と推稱せられたる哲人「ストックマー」氏の言へりしが如く「子の教育は其生れたる瞬間より始まる」と云へる格言は女皇の常に服膺して忘るゝ能はざる所なりき、而して女皇の特に意を用ゐられたるは皇兒等をして貴族的驕傲の癖習に染ましめざるの一事にてありき、故に其庭訓は極めて嚴重にして毫も假借する所なく亦其日常生活は質素を專らとし給へり。女皇は地位及

び權力の人の氣力を魔醉するものなることを確信し給ひき、故に皇兒等の其左右の諂諛に溺れて放慢の弊に陷るあらんことを痛く軫念し給ひ成るべく宮廷の生活に接觸せざらしむるとを努めたるが故に女皇の侍者にして尙且皇兒の音容に接せざるものさへありき、然れども其皇兒等が異日占むることあるべき至高の地位に相當する準備として出來得る限り身心上完全の教育を與ふるに怠らざりし也。

千八百五十八年皇太子「ウエールス」親王の十八才の成年に達せられたる時、女皇は書を送りて之を祝し且戒めて言ひけるやう「御身は御身の教育に關して是迄御身の父母の取り來りたる方法の餘りに苛酷なりしを思ふ折しもあらむ、されども御身の父母は御身をして四圍の諂諛に溺れしめず常に志操の剛健ならんことを期待したりき、今や御身は十八才の成年に達し自力を以て自からを持すべきの時となりぬ、自今御身の父母は最早何等の干渉をも試みず只御身の來り諮るあるに於いては常に悅んで之に答ふるに吝ならざるべし」と。

女皇の慈善的行爲

女皇は大英國の君主として亦た一個人として慈善行爲に勉められたることは普ねく世人の知悉する所にして一々之を叙するに於いては厖然たる大部冊を爲すに至るべし。

千八百五十年クリミヤ戰爭の起るに方り女皇は具に嚴冬將士の辛勞を思ひ手づから防寒の具を製して之を出征の將士に分せた給ひたるのみならず病傷兵の歸來する每に先づ親しく之を訪問して犒ひ給ひき。亦皇兒等に命じて各自の親筆に成りたる小供らしき繪畫を遠征將士の遺族を救助するの目的に依り當時開設せられつゝありし慈善會に出品

せしむる等殆んど至らざる所なかりき、クリミヤ戦役の終了と同時に印度の大判亂續いて起りたる際に於いても女皇は英軍の印度土人並に傭兵に對する行動の苛酷なりしを赫怒せられ人類博愛の天理に戻るものなりとして痛く叱責を加へたりき。現時尙未だ結んで解けざる南阿の戦役に於いても女皇は或は出征の将士を送り或は病傷兵の歸來を犒ひ或は遺族救護の方法を講ずる等斡旋盡力至らざるなきは人の知る所なり。

千八百六十一年最愛の皇婿を喪ひたる後、多くは「オスボルン」又は「バルモラー」の離宮に閑居して専ら慈善事業に女皇の一身を委ね給ひき、其「コボルグ」に「ヴヰクトリヤ、シチフト」と稱する徒弟及寡婦の救護所を設け「オロイト」島に貧民救助所を設けたるが如き殆んど枚擧するに暇あらす。

女皇の一世　附其崩御

女皇位に在ること六十有三年、敢て短しと言ふべからず、北海の水は長へに「ブレトン」國の島根を洗ひ「サキソン」時代よりの山河は形勢舊に依りて依然たるも英國の史上絶えて見ること能はざりし女皇の此永き治世間に於ける人の世の變遷は一波砕けて一波起り末は浮漚の泡と消えて當年の名殘り今果た何れの處にか尋ぬべき。

内閣の更迭ありたること上メルボルン時代より下サリスバレー侯に至るまで都合二十回、其間數ふべからざる政黨權力の消長あり、無名の士一朝にして雄名を擅にしたるものは今や斷碑の下ぞか冷かなる永遠の眠に就きつゝあるものあり、六十有三年人の世は眞に萬花鏡の如くなりき、而して此變移の潮流に立つて終始渝らざる而かも彌々切

實なる國民の敬愛を博したるのみならず英國を敵視する諸外國民の追慕する所となりしは實に「ヴイクトリヤ」女皇にてありけり、思ふに自今百年二百年後の英國人の子孫は現時ウイリヤム四世の逸話を聴くことを樂むが如くに燈下其祖父母等の口よりしてヴイクトリヤ女皇の昔話を聴き其德を頌して變らざるなるべし。

エリザベス、アン及びヴイクトリヤの三女皇時代を稱して英國史中最も光輝ある盛世なりとせり、「アンチ、サリック」法乃ち先づ皇女に王位繼承權を與ふべしと主張する人々は此事を以て最も有力ある論據の一に供する也。

エリサベス時代は封建の制度將に地に墜ちんとする時なりしも專制の面影尚到る所に殘存するものありて女皇は赫々たる王權の餘威を擁し當時歐州大陸の國王を刺擊し興奮せしめたる活潑なる潮流の渦中に立つて女皇は十二分の氣力を奮ひ給ひたりき、されども女皇の血管中には先考ヘンリー八世の血は正しく遺傳せられ、冷酷にして決斷に富み間々思ひ切つたる壓制的行爲ありしに拘はらず女皇の慧敏なる、國民の決意猛然として抑ふべからざるを見るに於いては飜然民意に從ふに吝ならざりき、當時内には激烈なる宗教上の騷亂を控え外には重大なる外交上の危機を擁し國歩極めて艱難なるの秋に際して縱横の手腕を振ひたるは巾幗者流稀に見る所なりき。

アン女皇の如きは其性格の賤劣なる元より言ふに足らず、其事業の多くは實に佞婦サラー、ジニングス又はメーシヤム輩の手に成りたるものなりき。只女皇の治下に於いて最も強力なりし英國の兵力は燦然たる當時の文學と相對映して偉彩を放ちたると幷に偉大なる政治家を輩出したること、

に依りて同時代の偉観を添へたるのみ。

ヴイクトリヤ女皇は「チユードル」王系の出エリサベスの如くに冷酷にして果敢あるには餘りに優しかりき。然れども亦たアンの如くに奸才を近づけ之に信頼するが如くに暗愚不斷にてはあらざりき。女皇は常に國民の輿望を認識し尊敬し給ひたると同時に王冠の威嚴を失墜せざらんことに留意し給ひたりき。

嗚呼此賢明にして仁慈なるヴイクトリヤ女皇は千九百一年一月二十二日皇子皇孫と一般國民との哀悼限りなき中に在りて溘焉として永遠の眠に就かせ給ひぬ。

詩人歌ふて曰く、

A truer, nobler, trustier heart,
More loyal and more loving, never beat
Within a human breast.

本傳は前號に記せしが如くに遺憾ながら茲に擱筆しぬ讀者幸に寛恕し給へかし。



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(二十九)

心のうちに、おもふことあらんも、たゞいまは、まぎれぬべき世のけはひあるうちにも、宮大夫、ことさらにも、ゑみはこり給はねど、人よりまさるうれしさ、のおのづから、いろにいづるぞ、ことわりなる』。右宰相中將は、權中納言とたはふれして、たいのすのこにゐ給へり』。內より御はか

しめてまゐれり』。頭中將よりさだ「けふ、伊勢のみてぐらつかひかへるほど、のぼるまじければ、」たちながらぞたひらかにおはします、御ありさま、そうせさせたまふ。』ろくなども給ひける、そのことは見ず。』

釋　義

●心のうちにおもふことあらん、心配ごとのある人の意。●宮の大夫ことさらにも云々、中宮の大夫は、すべて、中宮職の事を執り行ふ職なれば、このたびの御產には、非常に心を勞したり。しかるに、御安產なるのみならず、玉のごとき御男子御降誕あそばされしかば、大夫たる人の喜悅は、そも、いかばかりならん。されど、別段に、その喜びの色はあらはし給はねど、自然と他人よりは勝れて、その喜悅のさまの顏色にあらはるゝが、道理ありとの意なり。

●右宰相中將、參議右近衞中將兼隆卿なり。●權中納言、民部卿源俊賢卿なり。俊賢卿は、西宮の左大臣高明公の長男にて、母は、九條右大臣師輔公の女なり。後、大納言に進み、中宮大夫をかぬ。萬壽四年薨ず。●たいのすのこ、對の屋の簀子なり。簀子は、もと、竹を以て編みたるものにて、多く椽となしたり。建築法ひらけ、工術のすゝむにつれて、木にて美麗に造るに至れり。こゝも、間をすかして造れる小板じきあれど、むかしの稱のまゝに簀子といへるなり。おもひまがふべからず。猶簀子の事は、家屋雜考に、簀子、廂の外にあり。簀子椽ともいふ。こは、小板敷なれども、竹簀の如く、間を聊づゝすかして、打ちつくる故、此名あり。さて、間をすかし、面をとるは、雨露などのたまらぬ爲なりといふと。見えたるなど考へあは

すべし。●内より御はかしもてまゐれり、内裡より、中宮の御産屋の守に、頭の中將親定卿を以て、御劍使として、御劍をまゐらせられたるなり。●伊勢のみてぐらつかひかへるほど、伊勢國に鎭ります　皇太神宮に參向する奉幣使の歸り來らぬ間の意なり。●のぼるまじければ、穢產の穢ある御殿には昇り難ければの意なり。穢れたる場所にても、着座せざれば、穢れぬ由の規定あれば、御殿の上に昇らずして、庭上に立ちながら、御劍をたてまつり、また、御安產の御よろこびを申上げて歸れるなり。着座せざれば穢れざる規定は、延喜の神祇式に見ゆ。●ろく、ゝゝは常座の賞として賜へる物品をいへり。その賞として、定めて祿なども、多く賜ひけんが、その祿などの事は、いかやうなりしか、式部は見ざりき。

家計簿記法講義（承前）

磯部武者五郎

元帳決算一覽表

一ケ月の記帳了り、元帳の口々を締めますると、直に元帳決算の一覽表を作り、元帳口々の決算高を集め、一つに致しまして一ケ月の收入支拂の殘、又は、不足を明に記します。其の記入法は左の如くです。

但元帳の内財產の收支に關するものは、別に財產一覽表を作ります故、元帳一覽表の中へ加へません。又通常費にて收入に殘金あれば、其金額を財產へ拂ひ入るゝとか、他へ拂込みたるとかを拂の部へ記し、收入に不足あらば、借入れたる金額を受の部へ記します。

受　　　　　　　　拂

摘要	受 圓	受 十錢厘	摘要	拂 圓	拂 十錢厘
俸給	200	000	賄費	70	000
貸地貸家料	35	000	敎育費	7	200
利子	40	000	被服費	15	000
雜收	5	000	車馬費	20	000
			通信費	10	600
			衛生費	5	000
			租稅	20	000
			使用料	9	000
			修繕費	12	000
			交際費	10	100
			小遣費	36	000
			諸給料	5	000
			道具費	15	000
			雜費	5	000
			臨時費	20	000
	280	000		259	900
			差引殘金財産へ拂入る	20	100
	280	000		280	000

元帳決算一覽表

明治三十四年十月三十一日



實驗家庭の教育（其四）

東京感化院長　高瀬眞卿

育兒方法

一家を成してゐれば其家には自然に成立つた家風と云ものがある、この家風と云ふ者の善いと惡いのとに由つて良い子供も出來、不良の子供も出來る、已に一家の風儀が宜しくない處ろでは、如何に家庭教育々々々と騒いでも何の効もないのでありますから、家庭教育と云ふ事を大切に心得る親は先づ吾家の風儀を能く觀察して改良する點を見出したならば速に之を改めねばならぬ、一家の風儀と云ふ者は俄かに改め難いものには相違ないが必竟、夫と妻の心得次第でどうでも成るものである、一家の主權者が心を合せて改良しやうと思ふて出來ぬ筈はない、惡い風儀を其儘に差置て子供許り良くしやうとするは酒を飲せて醉せまいと思ふと同じ事でマヅ出來ない相談と言ふものでありますヶ樣に申せば、然らば如何家庭が風儀のわるいと云ふのであるかと問ひませう、其の家庭の善惡と云ふものは多くの親も大概心付ないものである、眞卿が見て惡いと思ふ事も親は然思はぬのがある、彼云家の風儀では子供が惡くなるは當然であると云つても親は一向信じない、これは無理のない事でありますが、試に二ッ三ッお話をすれば、夫の言ふ事を女房が承知しないで反對する事がある、永い間の事なれば勿論意見が違ふ事もある、ソレは無理もないが子供の目前で夫婦が口論する

と云ふは甚だ以て宜しくない、子供の身に取つては父も母も甲乙はない、親と云ものは神聖なものと思はするが家庭の秘事であるのに、その目前で口論したり議論したりするは以の外の不體裁と云ふもので一家の安寧と云ものは忽ち破壊されて子供は常に不安の心を抱く樣になり、父の言ふ事も母の云ふ事もつまり當にならぬものかと思はしむるに至る、また其子供に關係した問題にて、夫婦が議論するに至つては益々以て子供に非常の惡感を抱かするものであります、此事は後にお話するが、一家を整理する上に於て夫婦が口論をすれば子供許りではない奉公人迄が主人を輕蔑して、旦那の威權のない事も知れ奥樣の口の達者な事も知れて家憲が立ぬやうになる。モシ家政上に就て互に異見があらば子供の居らぬ處、奉公人の聞ぬ處で密かに口論をするがよい夫婦の間柄で赤くなつて議論する必要はない、物は靜かに言つても譯る、夫は常に教諭的に女を遇するものであるから平日其習慣を付て置ばいかに口達者な女房にても大きな聲で饒舌立る事はなかるべし、これ一家風儀の上に取つて第一の心得也　次に吾夫の所爲に就て其の善惡を子供や奉公人（或は親類友達）に遠慮なく話す妻君があります、夫の善行、嘉言を密に子供に話すは益あつて害はなけれども妻たる者が口づから夫の所爲に就て、たとへ、自慢にもせよ之を他に話すは宜しき事にあらず、交際上に於て言ふべき必要があらば格別として話すべき區域と云ものは或必要上より或點までを話すに過ぎぬ事なればこれは別問題也、お父さんは若い時云の事ありし、斯云事をして妾に心配させたり。云々の失錯をしたり何々の事は云々の事より起りし杯と語り、昨夜は酒に醉つて歸りたり、醉ひは

腹を立つて云々の無理を言たりなど隨分、子供にも話し、召仕ひにも語るものあり、これ自ら家風を惡くするものにて、子供の爲には少しも益なくして寧ろ大いなる害あり、また、子供の面前にて男女色情に關する下掛りの話をして憚らざる家あり、これは既に一家の風習となつて怪まぬ家庭もあれど多くは無教育の夫婦には有勝の事にて例へば俳優の事に就ての話、藝妓を買ひたる話、甚しきは親戚中の不品行者の談話をなして一時の興に乘するが如き、これ等は子供をして男女の欲情を養はしめ年よりは早く色情を發達せしむるものなり、次には家に來客ありとて藝妓、俳優、落語家などを招く者あり、此等を一家の中へ出入せしむる家庭にて良き風儀を維持するもの決してある事なし、言ふ迄もなく妻君の不心得より起ることでありますが其結果奉公人までも不身持となりて子供は勿論早く遊蕩家の仲間に入るものなり、其實例を二ッ三ッお話申すべし

一、神田の某町に男の兒一人持ちたる者がありましたが女房が隨分利口で口が達者で常に口論が絶えない、子供が家に居るのが嫌になつて夜る寢る時許り家へ歸る其結果惡友に交りて遊蕩を初める事になりました

一、小石川の或士族は子供二人とも不良の者と成しましたが、其一家の有様は甚だ風儀わるく女房は無教育、主人は不檢束、道樂者常に出入して男女の不身持の談話のみ絶えず女房三味線を彈き亭主歌をうたひ、子供をして之を聽かせると云ふ有様

一、神田の某商人は男の小供に踊りを習はせ善い俳優を出入せしめ遂に其子は遊蕩家となりのちには俳優となるにいたりました

一、某紳士は藝人を家に招き來客の時のみにわらず宿に出入せしめ其が爲に子供二人は早く遊藝を憶えて遂に放蕩をはじめ花柳の街に遊ぶやうになりましてその家に不良者二人を出しました

右のお話は極く適切の例のみを擧げたるにて此に類したる事實は甚だ多いのであります、之を要するに小供と云者は一家の風儀の感化を受けて成長する者で習ひ性となつて仕舞つては致方のないもの、之を眞卿は同化と名て置ます良い風儀の同化くるものあり、惡い同化もある、平日家庭を整理して風儀を崩さぬやうにして置ば別段に家庭敎育を八ケ釜しく言ずとも大概子供は尋常に成育すものであります。



育兒衞生談（五）

久利軍醫

●●●●●小兒營養法（續き）

●●五官　一體小兒は生れた當時に於いては僅かの感覺もありませんけれども、漸次に發生し且つ增加するものであります。殊に眼耳杯は速かに感覺の增進するものであります。またこの兩官は大切なる頭腦の入口でありまして、見たり聞いたりしたことの多少は、獨り精神のみならず、影響を身體の發育にまで及ぼしますから、小兒の時よりして最も大切に養護せねばならぬといふ必要が起ります。

●眼は小兒生後三週間は物體に向つて調節することも出來ず、所謂近視の狀態にあるものであります。此際には多く眠を嗜む故に、調節のなき間は注意して少しく暗き室に置き、漸次明るき處に習

慣せしめ、然る後初めは正方形、球形、平面等の形狀正しき物體、または正色を以て着色せし物品を示して之を敎へ、或は幾何の圖杯を示して成るべく自然に正しき習慣を附けるは最も宜きことであります。また小兒生長の度に應じ、野外に遙逍せしめ、天然の事物に就いて一々區別し、山川草木の現狀を說示するが如きは實に有益なることであります。

●耳の感覺は小兒生後直ちに發生しますけれども、二日目より慣れしむるを可とします。さりながら注意して劇烈なる音響を避けざれば、之がため鼓膜を損じ、若くは恐怖心を起し、終に精神機能の發育を妨げることがありますから、是れ亦大切に注意を要します。聽官の訓育に尤も宜しきは何であるかと申しますに、それは樂器であります。次に唱歌も宜しくあります。日本人は音樂や其他の音響色彩等を聽き分け又は視分けるといふことに付いては、其發育どうも不完全でありまして、此等の高尚なる快樂が後天性に滅殺されてあるのは實に遺憾な譯であります。夫れ故に小兒の時代より之を演習せしめて置きましたならば、生長の後種々の點に於いて利益が多からんと信じます。

●●●●精神の衞護法　精神の衞護は身体の健全と相伴ふべきは勿論のことでありますが、その營養法は全く五官の衞護法と等しくあります。何故ならば視聽の力健かなれば、從つて精神も健全に發達しますからして、父母たる者は能く之に注意せなければならぬ。また小兒の漸次成長するに準じまして種々の欲念が起ります。即ち初は功を貪ぼり、次に踏襲欲、取りも直さず眞似を爲したがる。次に色慾、貪知慾と順次に之を生じ、また課程外に事物を知らんとする志望が多くなります。兎に角

小兒の慾望にも善惡がありますからして、若し惡慾を發する場合には、その度合を鑑み、その方法を檢し、之をして他の良方向に移らしむる樣敎導するのが尤も肝要であります。何故なれば小兒の性は恰も水の如きものでありまして、容器によりて種々變化するものなれば、若し不良の點を發見せば、之を放任せずして漸次矯正して行かねばならぬ。否らざれば成長の後之を矯正せんとするは頗る困難であるからである。

夫れから小兒期中最も大切なるは品行並に精神の訓育及び學術の授業であります。さて小兒の敎育を爲さんとするに當り、その感情を正確にし、且つ健全に養成し、高尚ある品行上及び宗敎上の精神を發育せしむるときは、成人の後に至りても之を忘却せず、成業の基礎となるものである。然るに若し感情の發育薄弱あるときは喜怒哀樂悉く輕卒となり、一種精神上の疾病者となりて終に大事業も成效することを得ざるの結果を來します。

志望　は世の中に立ち種々爲すべき事のある内より一を撰んで成さしむる意志であります。此の志望は小兒の時分より能く發育せしむることが肝要でありまして、一旦志を立てましたならば、其の方向に向つて撓まず屈せず貫徹せしむるの精神を養成し、且つ同時に不良なる慾情を制し、艱難辛苦に堪え得る精神を鍛錬するのが肝要であります。何故なれば、艱難辛苦は生涯中何時逢ふやも計り難く、若し不幸にして生長の後僅少の艱苦のために貴重なる志を挫折するが如きことありては遺憾な譯であるから、小兒の時代より之が養成に勉めねばなりません。

授業　學藝を小兒に授くるには幾歳より初むるを可とするか、之に關する議論は種々ありますけれ

ども、兎に角餘り早く就學せしむることは宜しくありません。何故かと申すに、餘り早く就學せしめますると經驗上腦力も夫れだけ早く衰弱し、俗に十歳で神童と呼ばれし者も二十歳に及んで平凡な人物となる樣な弊害があるからである。且つ早學は腦力を衰弱せしむると同時に體力を衰耗せしむることもまた甚しいものである。經驗說によると、滿七歳にして就學せるものと、五歳にして就學せるものとを比較するに、甲は漸次學力を增して終に同學級に追進しましても、乙は中々さう行かないといふ實例があります。斯樣なる狀態でありますからして、小兒の時分より可成寛大に精神機能をして一樣に發育せしむるを可とします。漫然小兒時代の才力を賞揚し、或は一時の美名に愛着して功を晩成に期することを忘れますと、詰まり智徳の不具者を生ずる譯で、英雄豪傑は望んでも中々出來ませぬ。

女禮心得草（一）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

たちゐの仕樣

たちゐの仕樣については、むづかしい定めのあるやうに申して居りますけれど、夫は教授法の仕方のたてやうによる事ですから、極めてといふわけにはならないのであります。

起つ時には、兩手を膝の上のはしの方によせておきまして、兩足のかゝとをつまだてまして、膝を右の方のみをすこしもたげまして、右の方はなゝめにひねります。さうすると、起つ時にたちよいのです。右にひねります時には、左の膝頭をたゝみにずらしまして、右の膝がしらを

右にひねります。この時からだをばひねりませんで、ひざばかりひねります。さうして起ちあがりますときには、正面をむいてたつのです。この起ちかたは、通常のときのたち方の心得にありますので、あながちに礼式のけいこの時のみに限つたわけではありませんから、たれにもこの心得がありたいと存じます。

これはみなさまに申しあげて、其のしかたのわるいところがあるならば、教へていだゞきたいからかきしるしましたのです。

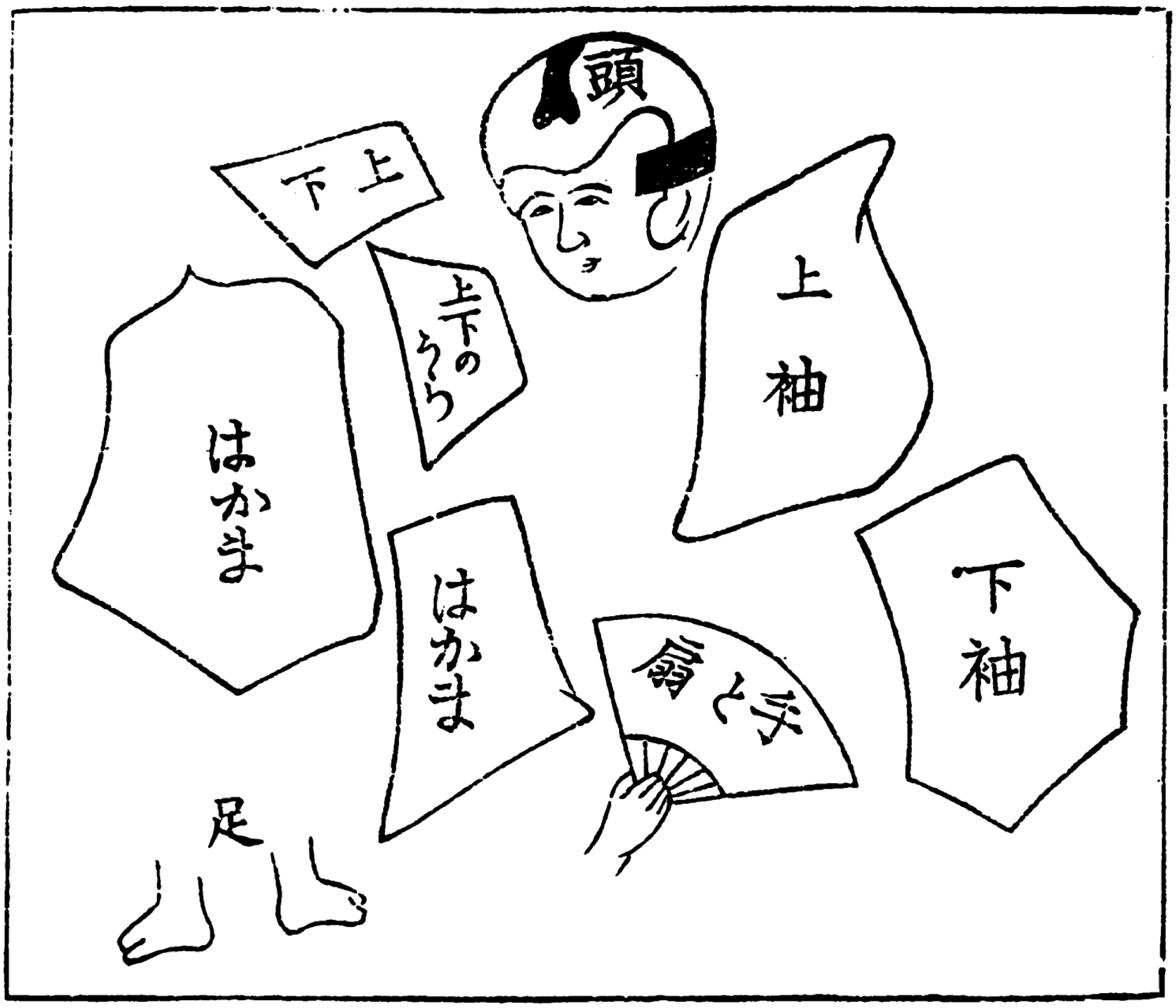
居るときは、たちどまりますときに、両足をそろへまして、さて左の足から、すこし右足より半足ほどあとへ引まして、左膝よりつきまして、右膝もつきます。さうして両手をひざの前へつきまして、先づ右手と右膝とをともにひきまして、つぎに左手と左膝とをともにひいて右と同一に合せまして、まわります。

この仕方もつねのこゝろえ草で、けいこのためにする事ではないと存じられますから、なさつてごらんなさい。さうしてこれも、わるいところはみをしへをねがひます。

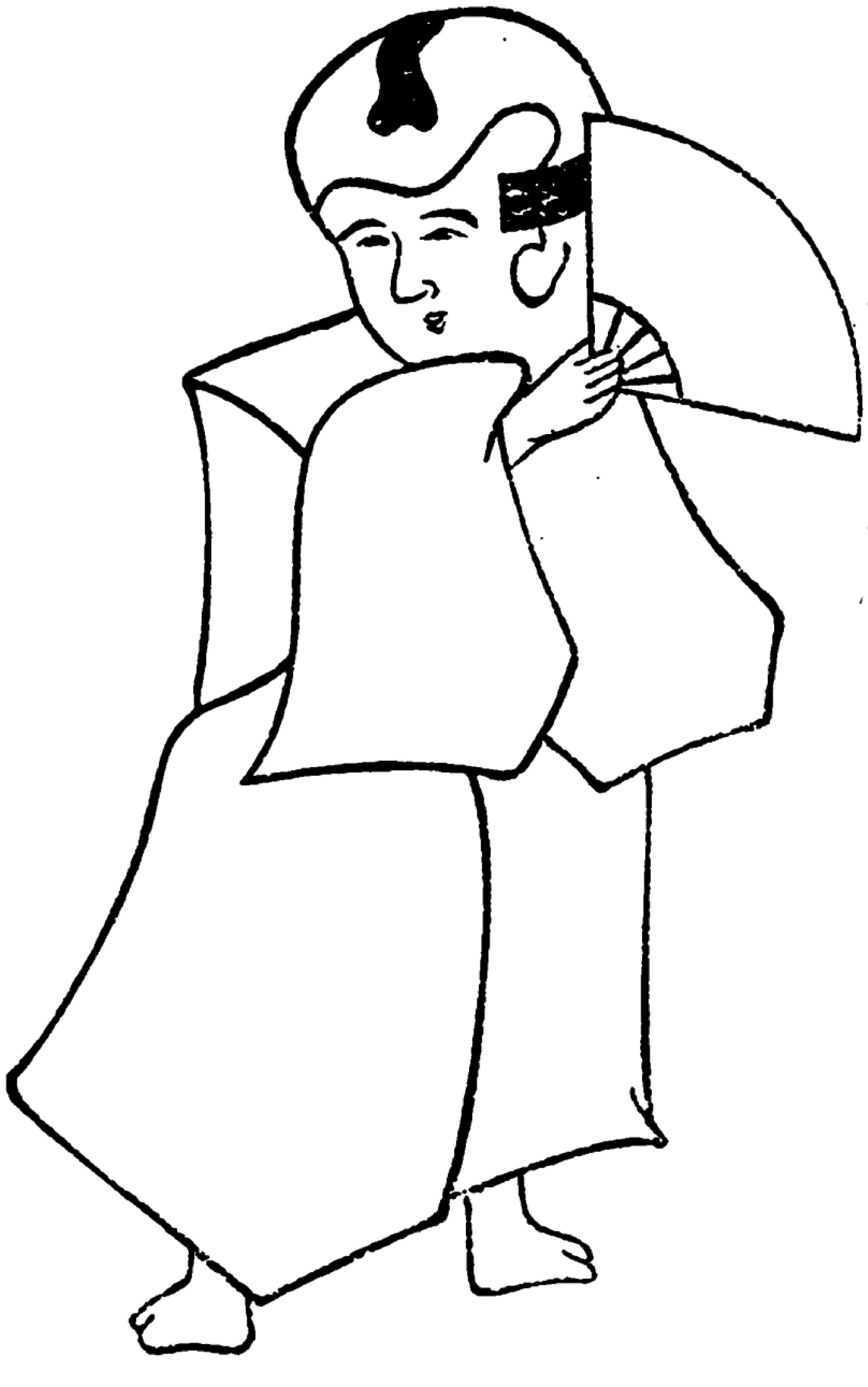
おしゑ

西山たい子

これは、ほんの小さき諸嬢のためごくやさしく手のかゝらぬやうにつくりたるものなれば、顔と手と足とは、白き厚紙のまゝにて宜からむ。両袖は、赤、青のきんらん等を用ゐ、上下、袴はちりめん、きぬ、いづれにてもありぬべし。上下のうらにある所は、黄なる紙などをはりおくもよし。



但し、上袖と袴の上になる方に少しく綿を入れ、他は入れずして可也。而して左の圖の如くくみ合せらるべし。


出来上リノ圖

だいどころ

牛肉煮揚

牛肉を一寸程の四角にきり、鍋にいれ、水をたつぷり注ぎ、暫く湯煮して、柔かになりたる時引あげ、ほそくきり置き、又大根をせんにきり、キャベツもほそくきりて、ざつと湯を通し、鍋に牛の脂肪をいれ、煙りの上りたる時大根をいれ、能くいため、後牛肉とキャベツをいれ、味淋醤油にて塩梅し、煮上りたらば器に盛りて出だすべし。

鶏のシチウ煮

若きとりの毛を去り、毛焼をなし、能く洗ひて腸を去り、骨付のまゝ能程にきり置き、鍋にバタをいれ火にかけ、色のかわりたる頃前の肉をいれ、胡椒をふりてかきまはし、鶏肉の狐色になりたる

時、鰹の煮汁に味淋醤油にて塩梅し、じやがいも、人参抔の湯でたるをいれ、又メリケン粉を水にてとき、是を注ぎいれ、能くかきまはし、しばらく文火にて煮込むべし。

真砂蒸

鯛、ひらめ、何にても白き魚の身を三枚におろし、醤油につけ置き、椎竹、きくらげ、人参等こまかにきざみ、湯煮してざつと味をつけ豆腐を湯煮したるものをしぼり、味淋醤油にて塩梅し、いりあげ、これに味をつけ置きたる品々を加へ、能く交せ合せさめたる頃、鶏卵を交せ竹の皮を引き、前の魚をのせたる上にいりたる豆腐をたいらにのせ、蒸籠にて蒸上て後、鰹の煮汁と醤油にて、味をつけたる汁へ、生姜の汁を加へ、これをかけて食すべし。

あさりの味噌煮

ねぎを五分程にきり、砂糖を少し加へ、水氣をして、あさりのむき身を能程に加へ、赤味噌を漉していれ、能くかき交せ、胡椒又は生姜を添へて、用ゐるなり。



漫録

衢口漫言（十四）

白松園主人

●●●●●●●●●●

◎凡人は必ず近眼なり

有形と無形と、物質的と精神的と、直接と間接とが、結果に及ぼす効力は、多き場合に於いて見誤らるゝこと古今の通弊なり。放蕩息子の親は、その友の誘惑を恨みて、おのれの育てかたのわろきに氣付かず。楠公回天の力は、新田氏が稲村が崎の一擧よりも輕視せられ、頼朝が石橋山の敗に、佐々木が奮闘して危難を遁れしめし時、志を得ば日本の半分を與へんといひしが、後終に忘れられたりき。三浦梅園曰く、たとへば、家に失火事あらむに、平生家の者を戒めて、火を大事にし、過ちなかりし人は賞せられず、火事にのぞみて、鬢をやき眉を焦しゝ人は、大に賞せらるゝが如し。されば常に火を愼みけるこそ、火事出來て働きし人よりは手柄なるべきを、却りて何の沙汰もなし。織田信長、今川義元と沓掛山にて戰の時、梁田出羽守計畧を進めて、終に勝軍となり。毛利新介大に働き、義元の首を取りてけり、信長馬よりおりざるうち、沓掛村三千貫を出羽守に與へ、馬より下りて新介を賞せられけり。誠に信長に非ざりせば、出羽守の功名新介に次ぐべかりしを。云云

國民新聞の句調を借りて云はゞ「戰場に於いて、其の義務のために奮闘する兵士の受ける名譽は大ありと雖ども、政治的義務のために活動する市民の名譽は、比較的に甚だ小なり。市政を巧みに處理したるものは、戰功を樹てたる將軍と、名譽の競爭をなし得べくもあらず。是れその行爲の結果の輕重によるにあらずして、一は其活動美的聯想を有し、他はその舞臺卑俗の感念と伴ふが故なり。市事は終に全く卑俗となり、市民はまた高貴なる活動をなし得べからざるものと、想像せらるゝに至らむとす」之れ余が凡人は多く近眼なりといふ所以なり。近眼なるは猶可なり。一歩を進めなば、全く失明に至る者あらむ。失明者は、殆ど人間の行爲を盡すこと能はざる者と知るべし。

◎熱情の人は遠慮少し

大惡は大善ともなるが如く、物の極端に達する者は、多く豹變する者なり。こゝを以て熱情の者は、一時的にして常にさめ易し。されども、常識に勇氣を加へたる熱情の者は例外なり。蒲生君平の如き是なり。世の中には君平の如き者稀なれば、一時の熱に浮かされて、飛び立つ如き情をば抑ふべきことなり。梅園叢書に曰く、幼約束とて、まだいとけなき後紐子供などを、時の中よきにまかせ、言ひ名付して悦ぶことあり。此の事誠に變なくんばよかるべし。されど、人間十年變も悦も、打ちかはる習なれば、あるは富めるが貧しくなり、あるは身上の難にあひ、あるは病あるは不和、終に人の笑となるもまゝあることなり。……或は若き女などの、新に夫におくれ、生きて世にあるべくも覺えず、いづくの淵瀬にも身を投げんなど思へども、さすがに死にもやらで、髮などきりたるが、月日の立つに從ひて、いつとなく心もかは

り、髪のばすもあり。嬉しさのあまり、憤の餘におもひたることは、後には違ふものなり。」此の言まことに至れりといふべし。この頃の軍人社會にも、よく聞く處なり。本心だに動かずば、墨染の衣、切髪姿に變せずとも、菩提を弔ふまことはありなん。例へば藁を燒くが如し。パッと一時は燃ゆるものから、消ゆることも時のまなり。戒むべき事ならずや。

◎生活と目的

人激する事あれば、吾衣食の爲にせず、縕袍の爲ならずといへり。是まことに男子の志ながら、これやすき事に非ず。と三浦梅園は云はれたり。然り、生活は人類活動の基礎なれば、之れが安泰を與へずして、妻子の凍餒を顧みず、自身一個の理想を果さんとするは、東洋的道德の弱點なり。人に刺戟を與へんが爲め、時に激語を放つは効力なきにあらねども。常にかゝる事を口癖にするは、多能にして不平の域に沈淪せる弱音と云ふべく、之れ小人の常態にして、心あるものゝせざる處と知るべし。

◎俳諧

高野蘭亭云へる事あり。われ俳諧を喜ばず、然れども、「うきくさや今日はむかうの岸にさく」此の句の如きは、詩も俳諧も同情にて、實に絶唱といふべし。云々此の句は、伊勢の乙由といふ者の作なり。何の技といへども、わざの神に入る時は絶唱ならざらむや、詩をのみ高尚と思へるからのことなり。なほ之れにまされる俳諧多し。女流にては加賀の千代の句に、

千なりや蔓ひとすぢの心から
朝顔につるべとられてもらひ水
ほとゝぎす〳〵とてあけにけり

和歌にても、後撰集に
　なき名ぞと人にはいひてありぬべし
　　心のとはゞいかゞ答へん

淺見絅齋は、此の歌を評して誠意の歌也といへり。

◎臭い物には蠅がたかる

當時月々書肆の店頭に飾らるゝ著書、數百の多きに上るべし。しかも多くは時好に投じて、奇利を博せんとするに外ならず。世道を箴め、人心を規せんとする意に出づるものは、十中の七八はなかるべし。こゝをもて、小説雜誌の青年少婦を淫するもの甚しく、社會の思潮は相率ゐて、之れに投ずる事水の低きに就くが如し。むかし、荻生徂徠先生の相識る寺に、萬年山祝言寺とて、江戸下谷にありき。先生の家に仕ふる老婆ありていひける樣は、彼の祝言寺の談義あるには、參詣する者多きに、こちの旦那のせらるゝ會讀の日は、來る者少しといひければ、先生微笑して、オウ〳〵臭いものには蠅がたかること多し、と云はれしとぞ。切言といふべし。

苦藥一服（三）

吾水生

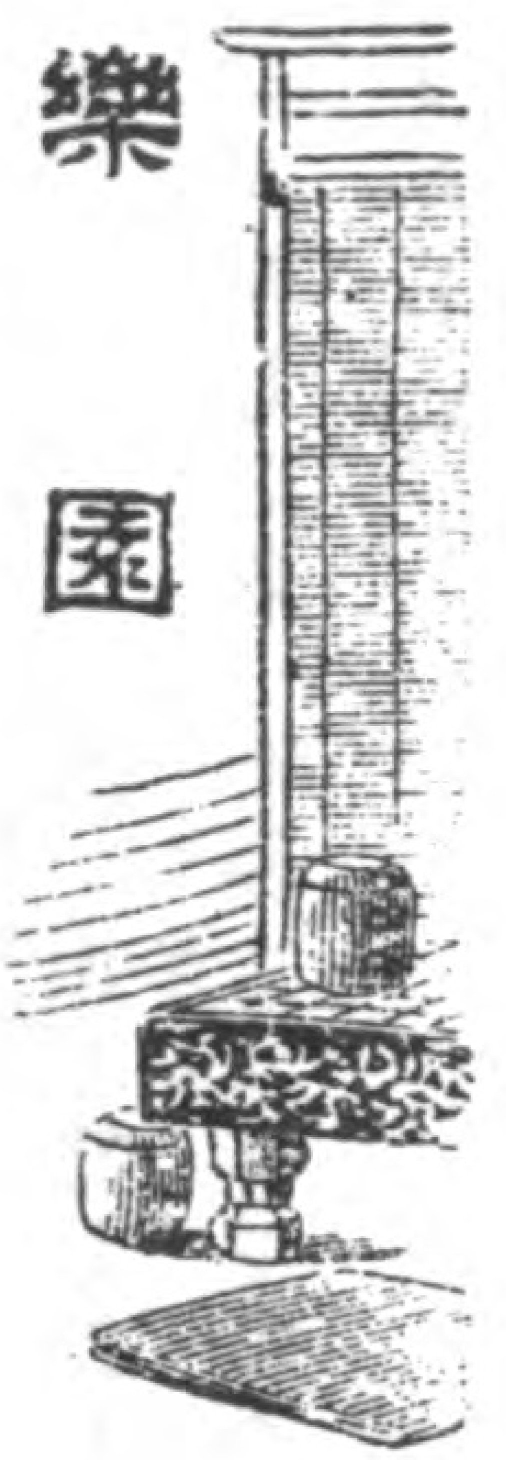
●女子の品性

女子教育の盛なるにつれて、之に關する問題の解決せられたること少なからざると共に、他の方面より女子を非難する者亦多し。如斯は全く自然の勢にして、益その進歩發達を期する所以、完全に接近する動機、誠に以て不祥の現象にあらざる也。

蓋し今の婦人にして、高尙なる理想を抱きて、之を實行せむとするもの稀なるべし。あるは公會に

あるは學校に於いて、堂々と論じ滔々と辨じて、揚然たる婦人あまたあるべけれど、之をわが身に顧みて疚しからざるもの幾人かある。畢竟、言論する割合に實行家に乏しといふも敢へて不可なし。かくて女學生もたゞ〳〵技能才智を勉め、衣服裝飾の美を競ひ、ひたすら他に勝らむ事を欲す。されば口さがなき京童は、概してお轉婆なりとにや、遂にえび茶式部といふ忌々しき異名を附するに至りぬ。學藝や裝飾や、素より必要なる塲合多けれども、その根本として女子の價値を判せむとする尤も切要なる標準は實に道德所謂品性の高下にありとす。いかに學業に長じ裝飾は美なりと雖も、その心卑劣にして、その行爲道德に悖ることあらば何の效果もなき也。たとへ修身の學問を習ひたりとて、言葉に信なく、行に表裏あらば、これ全く不善の人といふべし。五倫五常に對する學識なくとも、之を實行すれば善也。すべて道義上の眞價は、單に知るといふことに非ずして、行に依りて定まる。若し夫れ美はしき心をもちて、常に意志行爲にあらはさば、まことに品性ある婦人とやいはまし。もと、品性とは、意志の或る一定の形也。道義上善なる主義を以て、意志行爲を定め、全く之に違背せざるものあれば、その主義にして不善ならば、品性の不完全なるはいつまでもなし。即ち惡に執心深き人は惡品性にして、潔白の心なくして、あるが如く飾るは、虛品性といふべし。事を左右に托し、行爲曖昧にして、輕躁浮薄なる人は、蓋し品性云々を稱して論ふに足らざる也。およそ劣等なる品性のものは、人に卑しめられ、高尙なる品性あるものは人にうらやまる。故に決して人欲にまげらるゝことなく、明白なる智識を以て、道義上至善を撰び、鞏固なる意志な

以て之を實行せざるべからず。人を教育するの目的は、實に品性陶冶にあり。苟も品性がおのれの體面に關する事大なるを知らば、一日も猶豫する事能はざる也。



小説 薄紅梅

谷活東

上

『何樣』

軒の雀の囀り、春立つて未だ十日ともあらぬけれど、取別けて今日は、晝過ぎて初東風のをとづれ、さても珍しやと、老婆は、椽近く日南ぼこりに、つぎ物のそれこれ、目鏡越しの、覺束なくも針を運んで居た處へ、格子の明く音が爲たので、恁く言ひながら振向くと、

『私』

と答ふる聲。それは、日頃待ちに待つた聲であつたので、

『おう』

と言ひ樣立つた。聲の主は、上り口の障子、次の間の唐紙を明けて、この部屋へ入つて來た。これやこの老婆の愛女、今年取つて十八、お民といふ、品の好い、黒の三つ紋の羽織に、好みは藤紫の半襟。

『よくお出てだ、寒かつたらうに、』

自身長火鉢の鐵瓶を退けて、

『さア此處へお坐り、』

と向ふに布團を敷く。

『有難うございます、なに、今日に寒くはござい

ませんでしたよ』
紫の風呂敷包を脇へ置いて、
『敏ちやんは、』
と両手を火に翳した。
『お友達の處へ行つたがの、もういたづらでのう、』
『十六になつたでせう、』
『さうさ、』
『ホ……十六になつて、いたづらだつて、』
『さうかの、お〻、美く頭が出來ましたね、』
『い〻え、可笑しいの、今朝大急ぎで結つて貰つたもんですから、』
と、右手で鬢を抑へながら、
『下手でせう、』
『好い恰好だよ、私等の時分とは、島田もちがふからの』

『然うですか、おう忘れて居た、』
と、風呂敷を解いて、
『これは殿樣から、これは奥樣から、』
と、二品立派な水引の掛つた、反物らしい形。
『目鏡は、あ〻、あすこに、』
お民に立つて、椽に置いてある目鏡を持つて來て渡した。
『難有う、おう〳〵、立派な、』
と水引を解いて、
『何といふ物か、このごろの、』
『え〻、其れは秩父といふんです、』
『秩父、へえ、これは、』
『へえ』
『それは何んですか、私も知らないの、』
『何んでせうねへ、やつぱり銘仙の樣なものですねへ、』

『然うだのう、誠に難有う、歸つたら宜しく申上げておくれよ、』
『はい』
『皆様お變りもないかの、』
『え丶』
『若様も、』
『え丶』
『今日は、ゆつくり爲て居ても可いかの、』
『え丶、可いんです、』
『然うかの、ではおんぞ御馳走を爲ませう、お饂が好いかの、』
『え丶』
『いまに敏雄が歸て來ませう、』
『然う、今日は泊つても可いんです、』
『泊つて』
『え丶』
『ほんとかの、』

と不思議さうに娘の顏を見る。

下

『え丶』
娘は至極眞面目である。
『然うかの、だが、これ迄ない事だから、もしか間違でも出來はせぬのか、』
『い丶え、御心配なくつても可いんです、』
『然うかの』
とは言つたが、未だ母は心配らしい、それは無理もないので、奉公に上つてからまる二年にもなるが、然ういふ事は初めてであるのだから。
『御前様が有仰つたかの、』
『え丶、奥様が然う有仰つて、』
『然うかの、』
『未だ御心配なんですか、可いんですよ、大丈夫あの、』

『然うかの、けれども、折角二年も勤めてお暇を頂くなら、奇麗に頂かんではのう、』
『えゝ、然うですとも、』
と脇を向いた、けれども此の娘、何か言ひたい様にも見える。
嬉びの多い時は、何彼につけ心配も多いもので、母は未だ〳〵氣にかゝつてならぬ。娘の勤に行つて居る先といふのは、舊藩主で、懐劍一本、帶に放さず勤めた、この母から願つて、父親の亡き後、お民の十六の年に上げたのである。
『だからのう、能く勤めてのう、』
『えゝ〳〵、私も大事に勤めて居るのです』
『然うかの、然うだらうがのう、その上にも能く勤めんとのう』
『えゝ、』
かくばかり母を心配させては、と思たか娘は、何か言ひ出たさうと爲たが、言ひ憎くさうに、
『敏ちやんは　未だかしら、』
とまぎらす、其素振が母には能く知れるので、これは何事かあつたな、と。
『ねへお民、お前何も私に隠すには及ばんよ、それは勤爲る中では、大勢朋輩なども有る事だから、隨分喧嘩口論も絶えぬだらう、もし那樣事でもあるなら、ちやんと言ふが可いよ、』
『いゝえ、決して那樣事はないんです、奥樣も私を可愛がつて下さるし、皆も親切に爲てくれるんですから、』
『然うかの、それでなくては不可よ、』
『えゝ、お文さんなんぞはねへ、まるで妹の樣に爲てくれるんですよ、この間もね、私がお腹が痛んでねへ、ほんとにたまらなかつたの、其時あんぞはねへ、お民さん、寝ておいで〳〵つて言ふ

んですよ、でもねへ、何んだか悪い樣な氣が爲てね、それに奥樣の處へお客があつたもんですからね、私も一生懸命にはたらいたの、然う言はれゝば、言はれる程働きたくなりますねへ、』

『然うとも、けれども、然ふ言ふ時にはね、休むが可いよ、無理を爲て、永くでも寢る樣な事になると、大變だからのう、直に快くなつたかへ、』

『えゝ、夕方もう快くなつてしまいましたよ、』

『然うかの、若い内は兎角無理を爲るからのう、體は大事に爲ておくれよ、』

『えゝ、』

『お前はそんなに壯健でもないのだから、用心おしなさいよ、』

『えゝ、』

『奥樣はそんなに可愛がつて下さるかへ、』

『えゝ〳〵、これ、』

と襦袢の赤い袖を出して、

『これも此間下すつたの、』

『おう〳〵奇麗だのう、』

『えゝ、友染ですよ、』

『然うかの、ほんとに、難有い、』

と母は涙ぐんだ、それに付けても、もしや今夜泊るといふのは、何か仕損じてゞはなからうか、是非に聞いてみなければ安心が出來ぬと、

『げれど、』

と言ひ出さうと爲る時、表の格子が明く音が爲て、勢よく飛び込んで來たのは、弟の敏雄で、十六の洋服姿。

『おや姉さん、』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝、母は嬉し涙にくれて娘を歸した。十日程すると、此度は荷物まで持つて戻つて來て、上より

下されの縮緬一疋、これをお民が一世の晴着に、染めにやつた模樣はなんであらうか、庭に一本薄紅梅のそれさへ、色に出るこの春の朝！

（をはり）

維新の女傑 村岡勤王談

森林黑猿

村岡の事を演せんとしまするには、何しても其當時村岡と共に、朝廷のお爲に忠義を盡したる、勤王諸浪士の事蹟を述べんければありませんが、浪士の中にも梅田源次郎、賴三樹三郎などは、最も力を其事に盡したる人々であります。

京都の片邊り一乘寺村の村外れに、住荒したる無住の觀音堂が厶いまして、玆こそ雲濱先生梅田源次郎の浮世を忍ぶ假住居でありまするが、雨を防ぐに壁もなく、座する席もなくして、竈は塵に埋れたれども貧苦を厭はぬ儒者の境界、夫婦影を顧みて、晏然として居ります。妻のお節は、朝餉を炊がんと庭に下りて、落散る木の葉を拾つて居ましたが、遉に女の心弱く、日に〳〵迫る貧苦の爲に、玉の緒も絶えなん思ひを忍びかねると見えまして、鬢のほつれの、やつれたる面にかゝるを拂ひあげて、繼矧の袖に涙を押拭ひ、一葉拾つては天を仰ぎ、又拾ふては吐息をつき、

「アヽ……冬枯の軒の妻木もたきはてゝ、庭に落葉の積る間もなし。……昨日今日と過せども、明日は如何して口を糊さん」

とかこつ言葉を聞咎めて、奥より立出る梅田源次郎先生、

「コリャ節、一寸此處へ來なさい」

と言はれて妻は、ハッと心に驚きつゝ、良人の前

に閑雅に両手を仕へまする。

源「今の獨言は何事ぢや。……女心の悲しさ、左こそと察するに餘りあれども、貧富は天に在り、人の樂は心に在るのぢや。況んや去ぬる嘉永六年に、異國の使節相州浦賀港に來つてより、國内の動亂は麻の如く、畏多くも一天萬乘の君には寢食も安んじ給はず、海内の民塗炭の苦みを爲す。此時に當つて、苟も日本國に生れしもの、骨を摧き身を粉にして國事に盡さんければ相成らぬ。貧苦など憂ふる時ではない。嘆く勿れ、悲む勿れ。只々國に盡すの足らざるを憂へよ。」

と諭しますると、流石は雲濱先生の妻でありまして、漸くに涙を呑込みつゝ、

「淺ましき女の心より愚痴を洩しましたるは、妾の過り、お免し遊ばして下さるやう。實に仰せの通り、人の樂は心に在りますゆゑ恁う夫婦、一家和合して、草屋の月を樂むのが富みて、人の誹りを受くるより遙かに増して居りまする」

と言ひつゝ、暫時思案をして居りましたが、軈て筆紙を取り出して、さら〳〵と認めましたのは、

　こと足らぬ住居なれどもすまれけり
　　我をなぐさむ君あればこそ

源次郎之を見て、莞爾と笑ひ、

「ムヽ、好くこそ讀んだ、事足らぬと思へば足らず、足れりと思へば足れり。足るも足らぬも心の迷ひ、心だに道に飽くときは、如何なる貧苦の住居も樂み其中に在り。我等も一首

と源次郎も亦筆を取り、

　君が代を思ふ心の一筋に
　　我身ありとも思はざりけり

認め終りたる折柄、「雲濱先生は御在宅か」と音なふ聲に妻は、立上つて門邊に出で、「誰さまでムり

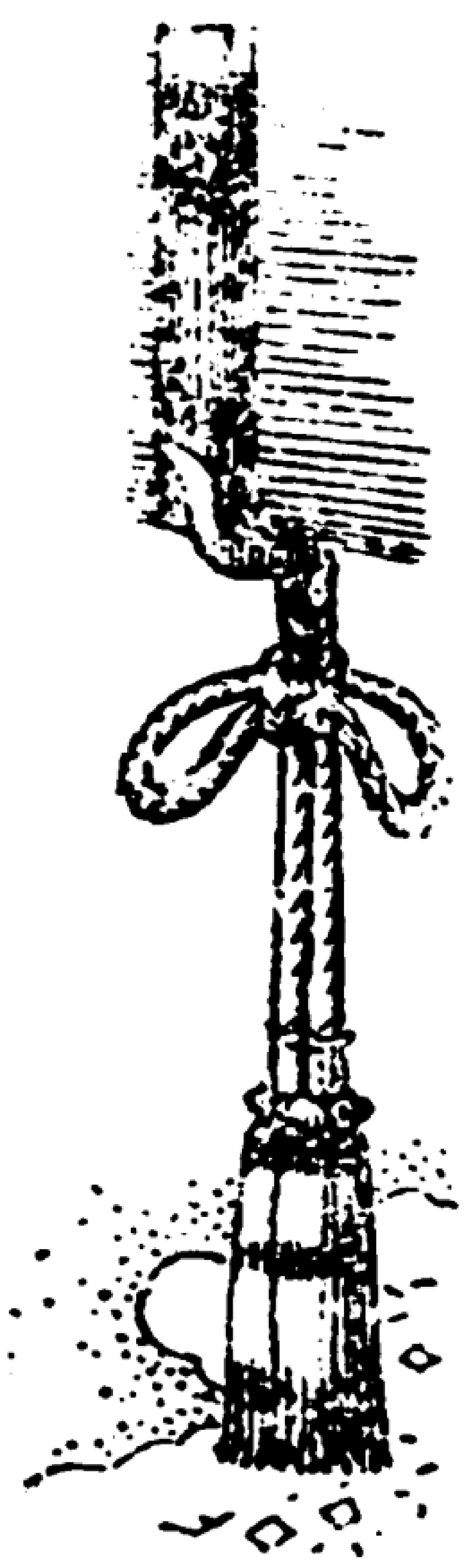
ますると問へば、
「頼三樹で厶る」と、編笠脱棄てゝ柴の戸を入り來る、眼鋭く、骨格逞しき一人の武士、それと見るより源次郎、忙はしく立出でて座に請じ、
「これは〳〵頼氏、此方よりもお訪ね申さんと心得て居りましたが、好くこそ枉駕下されました」
頼「イヤ疾く伺ふべきの所、ツイ寸暇も得ず、して、意外に御無沙汰仕りまして」
と言ひつゝ座に着けば、源次郎は妻に目くばせして座を下らせ、四邊を見廻して聲を密め、
源「さて其後、彼の一儀は如何相成ましたな」
と問はれて、三樹三郎は容を正し、
「誠とや人生意の如くならざる、十常に七八と申すこと豫て承知罷りあれど、十が十まで意の如くあらぬには、拙者も殆んど困却致しました。そもそも士は、己を知る者の爲に死するを以て本分とす。我々如き白面の書生にまで、天下の大事をお頼みなさるゝ水戸黄門公は、實に千歳一遇の知己と申すもの、殊に今大義名分を知つて皇室の爲に盡さん人は、三百諸侯の中に水戸公を措いて外になし。何卒此人を奉じて內勅を申し下し、一擧して尊王攘夷の實を擧げんものと肝膽を砕くと雖も、奈何せん九重雲深うして妖雲之を掩ひ、動もすれば姦佞の徒に妨げられて大事成就し難く、眞に慨歎の至りで……」
と嘆息すれば、梅田源次郎も共に長大息し、
「我々勤王愛國の士が斯まで力を合せ、心を一にして事成らざるは、實に憤慨の至り、此上は、唯一の計あるのみです」
頼「シテ其計と云ふは」
梅田「近衞公を頼み奉るの外御座らぬ」
頼「成程近衞公は正義の隨一、朝廷の公卿多しと

雖も、盡く瓦礫同然、其中に心を王室に存して力を國事に盡さん人は、唯だ公と三條公とのみで御座らう。去りながら人説の紹介なければ、如何にして頼み奉らんか」

と言はせも果てず源次郎、

「其には屈強の人物が御座る。餘人にあらず、近衞家の老女を勤むる村岡と申す婦人、今年は已に七十餘りだが、女でこそあれ才智人に勝れ、膽略も亦世に類なき傑女、此の局に説いて近衞公に勸めなば、此の一義は必ず成就する事疑ひ御座らん」

と聞いて、頼三樹三郎も思はず膝を打つて喜びました。



文林

原外霞　　久我建通

はつわらひいさ折りてこむくさの原
人のこゝろをひくかすみかな

曲水宴　　鍋島直大

流れゆくさかつきみても言の葉は
またわかむねに浮はさりけり

海上霞　　竹屋光昭

海原にひきわたしたるさほひめの
かすみのころも波にぬるらむ

野春風　　堤功長

いつかたに梅の咲くらむおのつから
花あき野へにゝほふはるかせ

海邊春月　宮地嚴夫

島やまはかすみに消えておほろよの
つきのみうかふ春のうなはら

霞中若菜　三輪義方

つみさし丶野へのわかなは夕くれの
かすみのそてそつ丶みはてける

山家梅　植松有經

山さとのしの丶あら垣ふくかせも
のとかになりて梅の香そする

月前歸厂　内藤存守

春の夜の月をあふきておもはへす
かりの別れにおひにけるかな

若菜　千葉胤明

うりにこし若菜をみてもみやこ人
ゐなかの春をおもひやるらむ

谷春冰　加藤義清

此ころのはるのさむさに音たえて
ふた丶ひ氷るたにかはのみつ

春朝　岩崎勝從

見わたしのよき家あれはさくら花
さくこのころは朝ゐせられす

人のもとに嫁ぐと云ふ人によみておくるとて　五十園德文

降るゆきに埋もれなから色かへぬ
松のみさを丶心ともかな

賴山陽　蜂須賀隨子

しら河の深きこ丶ろにたくへつ丶
世になかしけむ水くきのあと

落梅風　前田朗子

寒からぬかせに匂ひてうめのはな
ちりくるもまた面しろきかな

衞生會　　柳原愛子

ひらけゆく惠のつゆにうるほひて
青ひとくさもしけるみよかな

初島　　南鄕柳子

大磯のまつのかけより比る〳〵と
うらめつらしく見ゆるはつ島

鋸山　　日野西廣子

立まよふくもかとみえて海はらの
はてをよこきるのこきりの山

霞中雲雀　　保科節子

夕雲雀おちくるかたはわかぬかな
かすみのうちにこゑは聞えて

窓前梅　　佐藤艶子

うくひすの春と鳴さつるあしたより
咲そめにけりまとのうめか枝

庭若草　　原田蒼生子

吹風はまたさむけれときのふけふ
あをみそめたる庭のわかくさ

霞める空を雁かへる　　服部磯子

いくらとも數はわかねとかへる雁
霞めるそらにこゑそきこゆる

新井白石　　河村重子

山かつか折たくしはのゆふけふり
のちの世に社あらはれにけれ

故鄕柳　　國分美佐子

昔わかをさなあそひに結ひつる
かとの柳のかけふりにけり

鸚鵡をよめる歌　　渡邊龍子

咲匂ふ花をかなしみ、梅になく鸎はもよ、おむかしき鳥にもあるか、久方の空に羽うちて、雲はふ

く大鷲はもよ、おそろしき鳥にもあるか、さまさまの鳥はあれとも、くすはしきこれのあふむは、世の人の敎のまにま、百鳥のなくねまねつゝ、千鳥のなく音眞似つゝ、おも白き鳥にもあるか、鳥すらもかくそありける、現身の人にしあれは、人のなす業も習へと、人のなす事も學べと、人並になし得ぬ我は、あふむにも劣りてあれや、鸚鵡にもしかすてあれやと、今更に愚なる身をなけきつるかも、





三月五日兼題

古鄕柳

天

古さとのくち木のやなきめもはるに
たちかへりてもみるひとそなき

三河國豊橋　本多きさ子

評、意味深く、調つきはたらきあり。

地

ふるさとのむかしを忍ふやなきかけ
つきの光りもおほろなりけり

越後國村松仲町四百四百四十八　神戸辰子

評、懐旧の情あはれ深し。

人

ふるさとの筒井かもとのさしやあき
みとりのいろもあつかしきかな
愛知 中島郡 六輪村 角田もとゑ子

評、たくみなられどすてがたき趣あり。

甲之部

ふる里のむかしをとへはあをやきの
いともみたれてはるかせそふく
下総 大木光子

古さとはのらとあれてもいにしへの
はるあつかしきあをやきのかけ
仙臺 加藤よし子

すみすて〻年ふるさとのやあきかけ
やすらふそてにつゆそこほる〻
越後 田中濱子

大かたはたき〻となししふるさとに
もゆるみとりはやなきなりけり
和歌山 瀬戸ゑい子

ふるさとは今もかはらておいまつに
みとりあらそふはるのあをやき
三河 早川たね子

いくはるかくりかへすらむふるさとの
門田のくろのあをやきのいと
東京 名木山勝子

この葉こそ我家になひくやあきそと
ふみにはさみてあねのおくれる

乙之部

住すて〻としふるさとの軒端にも
はるくりかへすあをやきのいと
群馬 山田婦美子

ふるさとのむかしわすれぬ糸やなき
くるはることにうちけふりけり
大阪 大塚小黒子

きのふけふ〻るはるさめにふる郷の
かとのやなきやもえいてぬらん
仙臺 永井りやう子

あれはて〻すむ人もなきふるさとは
のきはのやなきあるしかほなる
東京 佐藤央子

あをやきの糸にひかれておとつれし
わかふるさとのむかしこひしも
大阪 伊勢村花子

年へてもなほわすられすふるさとに　肥後　野口静子
こゝろひかるゝあをやきのいと

むかしわか結ひすてたるふるさとの　備後　衣笠澄子
いほのしるしはやなきなりけり

ふるさとのかきねのやなきもえ出てゝ　肥後　田代綾子
むかしゝのふのいろを見せけり

手すさひに植ゑしやなきも年をへて　肥後　田代艶子
ふる屋のゝきにうちけふりつゝ

うめのはなちりてさひしきふるさとも　伊豫　上原のぶ子
やなきにうつるはるのいろかな

ふるさとの人もとやなきもえいてゝ　山口　村上操子
むかしのはるのいろそみえける

あれはてしわか故さとにきてみれは　肥後　服部倫子
いろなつかしくなひくあをやき

故さとにのこるやなきのうつほ木は　大隅　山田い子
むかしのかとのしるしなりけり

古さとのいほのしるしのいとやなき　安房　鈴木秀子
いくよのはるをくりかへすらん

住みすてしわか故さとのかとやなき　埼玉　横山秋子
むかしなからにはるかせのふく

したかけに手鞠つきたるふるさとの　愛知　瀬木せき子
やなきもいまはもえいてにけん

ふるさとのむかしの春のくるまゝは　三河　河合ぬひ子
井のへにのこるしたりをやなき

すむ人のありともみえぬふるさとに　青森　松山らん子
けふるやはるのやなきなるらん

手すさひに植ゑし門へのいとやなき　伊豫　竹村竹里子
むかしわすれすわれまねくなり

あはれこのやなき許りそわか住みし　三河　永井さい子
むかしのかとのしるしなりける

うゑおきし門のやなきはかはられと　滋賀　齋藤駒尾子
としふるさとはあれまさりけり

あれはてしふるき軒端にあをやきの　信州　岩間種子
たれに見よとかうちけふるらむ

立よりてみるもなつかしむかしわか　豊前　林ひさ子
すみにしさとのあをやきのかけ

ふるさとは風さへあれてあをやきの　東京　福田よし子
いとのみたれのいやまさりける

住み捨てしとしふるさとの糸やなき　長崎　日高かす子
たか世のはるかくりかへすらん

立よりてくりかへしみむふるさとの　肥後　佐藤玄子
はるをわすれぬあをやきのいと

今もなほむかしのまゝになひくらん　東京　椎野薫子
わかふるさとのあをやきのいと

住みすてゝとしふるさとの古やなき　甲府　名取正代子
かた枝なからにもえいてにけり

丙之部

古さとのゝきはのうめにおとらしと　熊本　田代治子
かきねのやなきはるめきにけり

いく春かくりかへすらむふるさとの　越後　高澤れき子
のきはにたてるあをやきのいと

としへてもなほしのはるゝ古さとの　越後　高澤やす子
のきのあをやきいろやますらん

むかしわかたけ比へせしやなきよも　東京　内田とく子
おもはぬまてにしけりけるかな

ふるさとのがとのやなきのねたたれて
そでにかゝるもなつかしきかな　東京　戸塚てつ子

いにしへのはるぞ忘らぬふるさとの
やなきのいとはたねすそありける　東京　片山あや子

ふるさとのいへ居の跡をとひくれは
おもひみたるゝあをやきのいと　東京　片山ふみ子

いにしへの宿とひくれはあをやきの
いとのとかにもうちなひくなり　東京　平尾あさ子

きて見れは袖にかゝるかふるさとの
さし木のやなきかせになひきて　東京　鍋田よし子

としへてもみとりかはらて古さとの
はなのなかめはやなきなりけり　東京　鍋田ふち子

年をへてかはらぬものはふる里の
のき端になひくはるのあをやき　東京　川村松子

古さとにたてるけふりとみねつるは
むかしなからのやなきなりけり　播磨　大谷友子

ゆひすてしわかふるさとの糸やなき
とくひとなくてはるかせそふく　尾張　角田あや子

知る人もあらすなりにしふるさとに
まねくはかどのやなきなりけり　東京　篠田圓子

ふるさとにくちのこりたるいとやなき
いくらのはるをくりかへすらむ　茨城　荒野たこ子

むかし我うゑしやなきを来て見れは
おい木なからもはるめきにけり　茨城　内田さた子

住みすてゝあれにしやとの糸やなき
こゝろほそくもかとやもるらむ　群馬　奥山花子

ふるさとのひともとやなき春されは
みとりふかめてわれをまつらん　東京　松村あさ子

春かぜにそなきのいとのなひくにも
こゝろひかるゝふるさとのそら　栃木　青木たま子

やなきのみおひてあれたるふる里は
しのふこゝろもいとにこそよれ　神戸　神戸春野子

ふる里のやなきはおのかいとよりも
こゝろほそけにかせになひけり　東京　佐藤成子

あれにあれてとしふるさとの青やきも
はるにはもれぬいろみねにけり　東京　三好珍子

ふるさとのやなきの糸にまたもこん
ふかきちきりをむすふうれしさ　大阪　大阪谷信子

ふるさとの庭のやなきを見ることに
ありしむかしのしのはるゝかな　大阪　伊勢村春子

はたなかにふかきみとりのひと本は
すきしむかしのかとのあをやき　東京　河田いし子

古さとはあれまされともあたらしく
かせによらるゝあをやきのいと　肥後　佐々富枝子

古さとのやなきのいとをくりかへし
見れはむかしのなつかしきかな　岐阜　佐藤そう子

近江のや志賀のふるさとたちよれは
はるはふりせぬあをやきのいと　肥後　坂本豊子

八重むくらしけれるさともくる春を
むかへかほなるあをやきのいと　和泉　福原萱子

やなきのみむかしわすれすなひく哉
としふるさとのあれしのきはに　河内　岡田みき子

年ふりてしるひともなきふせいほに
ひともとのこるかとのあをやき　河内　岡田春子

くちもせて年ふるさとのいとやなき
くるはることにみとりなりけり
肥後 仁保しま子

ふる郷のあれしかきれのいとやなき
いまたはるへともゐいてぬらん
信濃 臼井ひさへ子

春かせのこゝろのまゝになひくなり
わかふるさとのあをやきのいと
肥後 佐々有隣子

さる澤のいけのたまもとみゆはかり
あをやきなひくならのふるさと
肥後 佐々小琴子

ふるさとの軒端にたてるあをやきも
かけふむひとのなきそわひしき
三河 石川楽子

春も猶としふるさとのいとやなき
むすほれたるいろそ見ゐける
三河 石川久子

人すまてとしふるさとのあをやきも
さすかにはるはわかみとりせり
三河 石川南江子

あをやきのいとも色ますはるなれと
ふりにしさとはくるひともなし
三河 石川類子

いしすゑものこらぬ世まて殘りけり
わかふるさとのやなきひともと
大隅 稲垣政子

いくちひろうちはへぬらむ故さとの
やなきのいとはよりてみもせす
大隅 山田よれ子

あれはてゝとふ人もなきふるさとに
やなきのみこそはるめきにけれ
東京 牛山紫子

人すまてとしふるさとのかとやなき
もゆるはるへはつはめとふなり
埼玉 横田音羽子

花そののむかしのはるなしのはせて
あをむみかきのたまやなきかな
大阪 桝田登子

ふるさとにむすひておきし糸やなき
三河 服部萬子

ぶるさとに春きてみれはいとやなき
これそむかしのよりところなる
三河 服部正子

ふるさとのむかしのはるの稚やなき
いとゝこひしとまれきかほなる
三河 竹尾みね子

ふるさとのむかしの春にかへりても
わかたけよりもたちのひにけり
三河 三宅中枝子

あたらしくそめかへしけり故さとに
みよとやまれくあをやきのいと
岡山 三井松子

すみ捨てゝとしふるさとは青やきの
くちのこりたるあをやきのいと
備中 三井良子

ふるさとののき端にうゑしあを柳の
いとこそかとのしるしなりけれ
大阪 中舘やう子

主なくてあれしのきはのいとやなき
いかにしけりてわれをまつらん
東京 武谷睢子

ふるさとの春をたつれてきて見れは
むかしなからにうちなひくなり
東京 武谷長榮子

立かへりやなきのかけにやすらへは
うゑにしやなきかせになひけり
近江 奥村菊千代

ふるさとの古木のやなきもゐいてゝ
むかしのはるにあふこゝちして
滋賀 山口しげ子

ふるさとのあれし垣根にやなきのみ
はるをわすれぬいろそ見ゐける
近江 奥村道子

いつの代にうつし植ゑけむふる郷の
むかしなからにうちけふりつゝ
信州 岩間千枝子

あれはてゝすむ人もなきふるさとに
くちきのやなきもゐ初めにけり
豊前 林まとか子

たかさしおきしやなきなるらん

けふもなほあすかの里にいにしへの　はるくりかへすあをやきのいと　東京 山本梓子

うちたれて春くることにしのふかな　ふるさとかはのきしのやなきを　東京 槇手なよか子

あれはてゝすむ人もなきふるさとは　やなきのみこそはるめきにけり　東京牛 山棠子

年を經てわかふるさとにたちかへり　見れはゆかしきのみちのあをやき　東京 折原きん子

住みすてしさとの靑やきはることに　もねてやわれをまちわたるらん　淡路 泉いし子

年をへてたちかへり來しふるさとの　やなきはわれをまれきかほなる　淡路 泉久巨子

いにしへの垣根にのこるあをやきの　みとりもうつるにはのいけ水　肥後 濱口貞子

たれにかもうちなひくらんふるさとの　おのかうゑにしにはのあをやき　東京 椎野鋭子

古さとのみかきのやなきいまもなほ　はるはみとりのいろまさりけれ　東京 椎野淸子

ひとねたをたなりて行かんふる里の　むかしなからになひくあをやき　東京 椎野ぬき子

春かせにみとりのいろやまさるらん　ふるきみかきのあをやきのいと　東京 椎野秀子

幾はるかそめかへしけんふるさとの　いろもかはらぬあをやきのいと　陸前 吉澤たき子

わかあれとともにうゑにし古さとの　やなきのいとを立ちよりてみん　伊豫 小田操子

はるされはわかふるさとの門やなき　大阪 日下緣子

古さとのしのふかをかにきて見れは　いかにみとりのいろはそふらむ　茨城 荻原季子

目しるしにむかし植ゑたる古さとの　なひくやなきにそてそひかるゝ　東京 泥堂きくよ子

としをへてやふれすたれの故さとに　かとのやなきにはるかせそふく　肥後 德永萬壽子

靑やきのいとよりかくるはるかせに　こゝろひかるゝあをやきのいと　肥後 德永廣子

ふるさとの靑やきのいとくりかへし　なほしのはるゝふるさとのには　肥後 德永識子

春ことにまゆつくれともふるさとの　むかしのはるそしのはれにける　肥後 千知波橋子

思ひてゝたゝつむそてにかゝりけり　のきのやなきはくるひともなし　東京 淸水春子
おのか手うゑしかとのあをやき

三月五日兼題

希望

天

伊豫國松山市一番町　宇高松子

此世に生れて此願はしかるべきことてそ多かめれと、双びが岡の法師もいはれけん。實にや高きひくきのけじめこそあれ　人として誰かは希望あか

らんや。彼の武人が身をきる冬の寒さも、あら金の土もさくなる夏の暑さも、事ともせず、其業を勉め勵むは、國をまもり仇を防がん爲なり。文學ぶ子等が、雪に螢にいそしみはげむは、やがてはまれある桂の枝を手折らんとてなるべく、農夫が春夏かけてのいたづきは、ゆたかなる秋の田の實を得んとてなるべし。我等が朝夕家の業をつとめ學びの道にいそしむも、偏に身を修め、智をみがきて、進み行く世におくれざる樣、はた他日人の妻となり母となりて、よく家を齊ひよく子を敎育して、老い給へる父母の御心を安んじ、且つは我大君の御惠の、萬の一だにに報い奉つらんとてなりけり。

評、君の希望こそまことしき事ならめ。皇國の婦人はみなかくてありなむ。かつ、文章なだらかにして、めでたきふし多し。

地

大阪市西區新町通三丁目一五九邸　日下德子

およそ世に活けるもの、誰れか望みなからむ。朝に生れて夕に死する蜉蝣すら、なほ希ふところあるなるべし。まして、百の齡も保ちかたきにあらぬ人の身にしあれば、その大なると小なると、尊きと卑しきとのしなこそあれ、唯望みあるが爲に活けるが如く、これなくば、時の間も世にあること難かるめり。其一つの事かなへば、又次を思ひ、百の事たれば、又千を思ふ。身終るまでやむときあく足れることなきは、免かれがたきこゝろならむ。さるが中に、われ等婦女たるものゝ、當に希ふべき所は何ぞや、黃金か、あらず、玉か、あらず、それ婦女としては、子を產めるも產まざるも、ひとしく、これ國民の母、といふ重きつとめを負へる身なり。世に類ひあき、此尊き吾すめら御國の子等の爲、先身すこやかあらんことをねがひ、心美しからんことを思ひ、ふみ學ばんことをのぞみ、然して、その名と行ひとを全うせんが爲に、又やむ時なく、足るときなかるべきなり。

評、文章勇健にして而も奇拔、その望みげにさもあるべし。

人

麻布區東町四十七番地　林常子

からやまとを問はず、古へよりとり〳〵にすぐれたるひじり數さはあれど、誰かは心にかたき希望さへえもたず、そが道にすぐれたりし人やはある。げに希望は、人たる道のいと重きものにて、これあればこそ奮ひたちていそしみはげみ、そが道に

も達するなれ。希望ある人は、舵なくしてうかべる船、術なきに走る馬にも類へつべく、いかでそが歸り着くところを知らむや。さるを世の人、已れ長たり今よりは成り難しなど云ひもて、そが希望をすつるものあり。いみじきひがごとにこそ。晉の皇甫謐は、年二十四にして、始めて書を讀み、蘇老泉は齢二十七より、文章を學びたりとかや。そのほか斯るたぐひ、これを求めなば、我國にも少からぬぞかし。あはれ大方の世の人、世に立ちすぐれたらんことをほりせば、すみやかにおのが希望を定め、いそしみ勉めて、あくまでもそが道に達するやう心懸くべきなり。

評、冗長に流れず、趣意よく貫徹せり。

（以下原稿到着順）

東京　名木山靜子

蝶よ花よとあこがれて、かへさ忘れしばかりの春も、手馴れの扇を池の汀の緑の蔭にいこはせて、涼しさを喜びし閨の夏も、あるは、塵計り雲もなく、さわ渡りし月の夜半、秋草のもとに歌ひ出でし鈴虫をきゝつゝ、はた珍らかにも、藁屋の軒に六つの花散りしきて、目驚かせしあしたなどにも、そゞろに忍ばれて物思ふふしとなるは行末の事になんありける。げに、人の希望には、數限りもなくあるらん。そはおのがさがによりて、定むるものもあらん。はた、おのが選りの者の、仕業によりて、心に行末の事ども思ひやるもあらん。または、遠き末の事などは、心にもせで、まのあたりの事のみに、物のみ打望みつる者もあるらん。あゝ、思へばはかなき望みよ。我が希望の光はげに、荒き嵐にあへる細き燈火のごとくなりし時に、いつも〳〵、奮ひ起されて、もて、燈となさしめらるゝは、彼のコロンブスがわざなりけり。あはれ、君は、長き月日のそが間、かよわき舟に、大わだつみ漕ぎつゝ、行け共〳〵、たゞ目にうつるは、空と水のみなりき。双眼鏡もちてあやしのカンパンに立てる君は、唯さけぶ嵐と狂ふ浪の外、ものを眺めざりき。一ひらの木の葉だに流れこずして、舟子の怒と恨みは、君が望をやき盡さんの炎となりて君が身をおほひぬ。されど、その心にありし強き忍耐の綱は、なつかしきスペインの浦にしも船を返さしめず。舟子の怒に打勝ちし望の光は、戀しき妻子ある空に、舳をば向はしめざりしコロンブスは、必ず、新らしき陸を見出すならんといふ、此強き希望の光満ちたりしなればなり。まことに君の希望はのぼる朝日よりも光ありけり。さるに、我は、如何にぞや。我望は、文學の道に社ありけれ。眞、已が勤をつくし、心を奮ひ起しつゝさて志すべきは、我望みなる、此文學の道にぞありけるよ。花の朝、とばかり結ぶ夢の程にも、月の夕、思にふくる閨の程にも、そゞろながるゝ胸の思ひ、行末の事どもは、げに、文學の林なるかな。扨も、呉竹のうきふしゝげきうつゝ世に、いかにして、こをとぐべきか。噫。思ふまじ〳〵、今日迄のこと蝸牛の歩みとても撓まずば、いつか樂しきゝはにとゞくべし。彼コロンブスは、文明の光明かならざりし十五世紀の人の、ねむりをさませしを。用なき事に思ひふくるまじ。ひたすらにつとめはげむこそいとよけれ。

大阪　桝田登子

凡そ世に望む所、四民ひとしからず、いとさ〴〵まなれど、おの

が幸〳〵と、の給はせし幸にこそあれ。そも、臺鼎を除きまつるの外、官位爵祿は更なり、士は大進を、校は將を望み、儒醫は學位博士を、小は高官を望み給ふべし。田夫は秋の豊年を、工は妙技を、商は利を願ふべく、貧は富を、富もまた巨萬の富を望み、兒は父母の慈を、父母はた、兒の生長を、主は良僕を、婢はた良主を、子は良師を、師も又才備兼徳の子弟の、校より顯はれ事を望み給ふべし。山人は山幸、海人は海幸を、小人は君子を、君子もまた聖人を望むべく、禪師も尚、大徳を願ふなるべし。雲水を友とせんと思ふ事なき物から、古人黃檗の開祖、某のあざりは、一文を望みて志賀の大津より京迄守の殿の輿に隨ひしとぞ。文人は閑雅幽邃の地に、山紫水明を翫び、吟咏に心をやらん事を望むべく、畫人はたひとしかるべし　山窓靜なる草庵に、風月を樂み、七椀の香に心をいすゝぎ給ふ茶人もあるべし。花鳥を愛して、獵に植培に、好めるのとは野に交り、山ぶみを望み、歌人はかも山の高きしらべを、俳人は其嵐を、狂歌師はた蜀山を、謠曲其他いづれも、皆なくはしき流を望むべく、梨園遊浮の婦は、技を磨くよりも榮花の春を望むべし。幼は壯を、壯は公に私に、事多端にして望重大なるべく、重大なるからに、四備三者を能守りて、其志を立つべし。一事を損ふとも、後事は勤むべし。唐歌にも、錦蠻たる黃鳥止る處を知るとかや。人にして、其心の止むべき處を知らで、財に任せて徒らに資を投じて、百術に身をゆだれんは、二兎をおはざるのためしぞかし。ふじの嶺のならぬ思ひは立てざるもがな。おのれ世のすれ者にや。浮華の美も望ましからで、松風の聲靜かなるまどの内に　なぐはしき古賢婦徳の遺跡を偲びて、千世のふる道にたづねまほしうおもほゆてなん。香爐峯の雪めざましうあなれど、紫のゆかりの色の、いと〳〵偲ばしう。あはれ、世のおみなたちの望みほりせんは、此二本のうるはしき言靈の光にこそと、ひと本のひたすらに偲ばれてなん。

東京　篠田圓子

世の中に、人と生れ出でゝ、誰か希望なきものあらむや。されど其の希望は、人の面のかはれるが如くに、各々異なれるは今更耳新らしう云ふまでもなけれど、甲の云へるは、今や黒雲西に起らむとするの今日、身体の健康なる以上は必ず軍人となりて、よく御國を守り　、大君を安じ奉り、以つて限りなき國恩の一端に報いまつらむといひ、又乙の云へるは、かゝる文明の治る大御代に生れあひて、軍人となりて國家につくさむよりは、むしろ、教育者となりて國の安政を祈り。國民の開化をはかり、以て極みなき國恩の一端に報いまつらむといひ、又丙の曰へるは、内地雜居となりて外國との交通ます〳〵しげく、昨今舊來の同盟さへとゝのひ、愈々船舶もはげしからむ今日、余は商業家となり各國の貿易を盛になし、國家の富を計り、以て大君に報いまつらむといふもあり。女子なれば、女教師たらむ。或は家政を整理し、たちぬひの事に心かくるこそ肝要なれといふもあらむ。其の程々よりて、皆希望は異なる者なりけり。されど、此希望は、何れを可、何れを不可とは云ひがたかるべし。唯々已が身の分限をかへりみてそのよき樣々の望み所をこそ可とはすべきなれ。富士ほどれがひてといふことわざさへあればとて、みだりに大なる希望をいだく者もあれど、あまり身にあまる大望をいだきても、其の半にして力を失ふやうな事あらむには、かへりて、小さきにも劣りぬべきか。わが身の分限かへりみて、其ほど〳〵の希望をこそ守るべきなれ。我ざい人に從れ、何の希望といふ希望もなけれど、ただ思ふまゝをかきつけしになむ。

肥後　佐々有鄰子

世には希望なければ、社會に交りかたしとはうべなりけり。山里

の住居にも、都におなじ希望者あり、如何となれば、六歳より尋常小學校に入れて、高等小學校をも卒業すれば、尋常女子中學校にいりぬ。さて卒業すれば、遠路を隔てし東京の高等女子學校にいらんと欲して父母の膝下を離れんと、孝養のつとめをも欠きて、走りまはるものもあれど、妾はしからず。朝夕師の君の敎へ導きたまひし婦道を守り、家業をはげみ、父母に姉弟にまことをつくし、晝夜おこたらず。嫁しては、夫家の職にしたがひて、彌繁昌せしめ、千代の松が枝さかりに、子孫の幸福を求めんことを、希望の第一と神かけて祈るのみ。

備前　近藤琴雌子

女豪傑たらん事を希はず、女丈夫たるを望まず、將た修めて、世上幾多の子女の敎育の任に、あづからん事を欲せず。要するに、後來圓滿なる家庭の主婦として、よく理め、夫をして內顧憂ひあらしめず、なほ母となりては、其子女に對し、純良なる家庭敎育を施し、而して他日、各々其望むところに從ひて、方針を定めしめ、以て、巳が精神的快樂をもとめん事を、今より期して待ちつゝあり。

妾の希望たるや他なし。唯だ此一事あるのみ。

和泉　福原菫子

梅は霜雪のくるしきを耐へ忍びて、長閑なる此春にあひて、咲きいでんとす。これ既に希望あればなるべし。されば人にして此世に生れ出でゝ、貴きも賤しきも誰れか希望のなきものやある。希望ありてこそ、心にうれしく勇むふしの有ものなれ。されば、いかばかり、心をくるしめ身を勞するとも、敢ていたむなきなり。あはれ、浦安の民と生れし甲斐には、いよゝ心の玉を磨きて、美しき上にも美しう、唯一すじの大道をたどりて、女なりとも御國のため家の爲に盡さでやはと、思ひの一ふしかくはつゞり

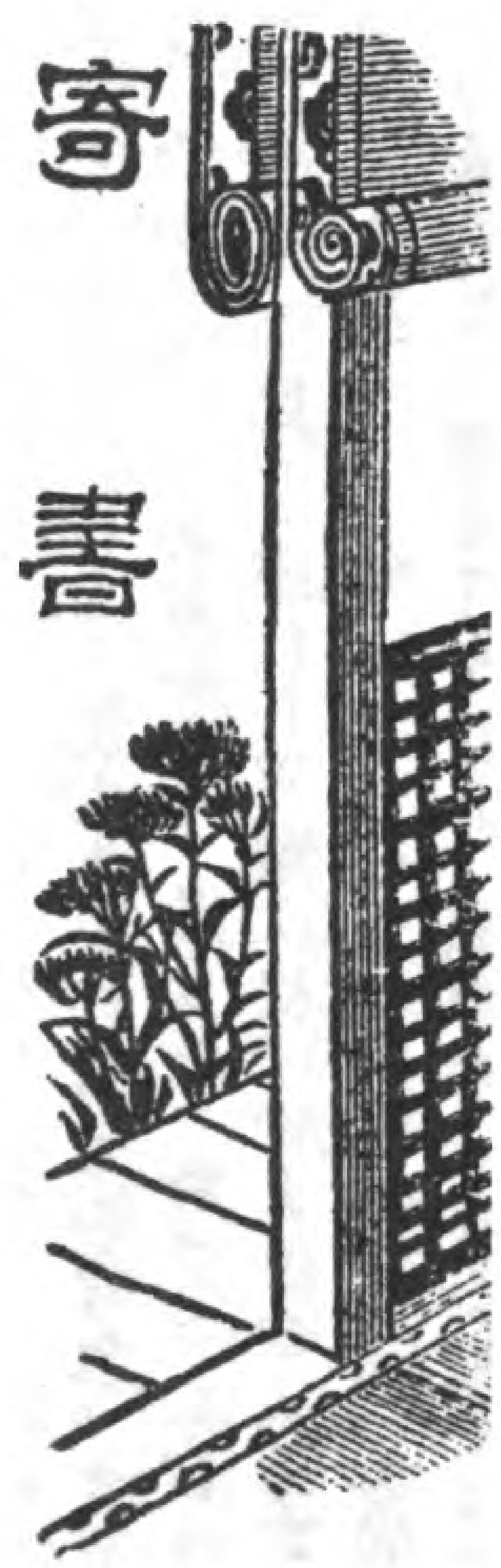
ぬ。

相模　鍋島春子

家の貧富と、賢愚のけじめこそあれ、凡人にして、希望なきはあらぬぞかし。妾も亦其一人にて、苟も皇御國の婦女に產れ出しからは、いかで其本分をつくさではやむべき。いでや、今より萬事につけ、一入心をそゝぎて、樂しき家庭を作り、夫をして快氣に滿たしめ、且つ內顧の憂なからしめし後第二の國民を養成して專ら世の婦人の鏡とまでならずとも、あはれ、ちる時に惜しき人よの一言きかまほしき望みにこそ。

熊本　田代治子

希望先つ起りて、而して後に成功あり。希望は夫れ成功の母なる哉。然り、巳れ先づ敎員たらん事を希望せざれば、決して敎員とみ、して巳れ莫し。巳れ先づ實業家たらん事を希望せざれは、實業家としての巳れ莫し。故に小なる希望は、小なる成功を產大なる希望は大なる成功を出すものなり。然れども、こゝに注意すべきは、成功の大小は同時に其人の大小を意味するものなるを。されば、成べく大希望の人たらん事を願ふべし。是、希望は如何にして起るか、曰く、多くは、境遇、慣習、勸誘、感激、學理、宗敎、等より起るものなり。若し人々にして、望みなき時は、國家の爲になる事莫し。ある書には、希はざる人に其事のなる道理萬々莫し。又今日の國勢の下に生息しつゝある我同胞は、一人も無希望の人なるを許さずとあり。誠に然り、故に人々長短の希望を起さゞるべからず。



藤原靜子孃に質す

松籟子

女鑑第二百四十六號の社說欄內に乘せられた、藤原靜子の女子の習ふべき學藝に就いての說は、社說欄內にはあるが、只藤原子一個の說で社全體の意見ではあるまいが、吾輩は感服せぬのである。あの說にすると全然今日の女子敎育を否認することにある。勿論藤原子は、中流以下の女子の爲に云ふとは申されてあるが、中流とは如何なる階段であるか、之れも見樣によりて異ならざるを得ないけれども、凡そ女鑑を讀む女子に對しては、全く間違た見解と云はなければならぬ、事新らしく云ふまでもないが、女子敎育の目的は賢妻良母を養成するにあつて、それには、單に算盤と裁縫のみを習ふて目的を達するとは覺束ない話である。賢妻として能く家政を整理するには、それ相應の學問をしなければならぬのである。是に於いてか家政學の必要を生ずるので算盤と裁縫のみでは其目的を達することは出來ぬことである。又家族團欒溫平たる家庭を作り、良人を慰め子女を樂しましむるには、夫れ〲の藝術も必要である。人間を一の器械視して、只働けばよい動けばよいでは、誠に世の中は乾燥無味に陷ること丶ありて、文明も開化もなき有樣となりはせぬかと思はるる。又良母となりて、家庭に子女を敎育するは女の役目である。その役目を果さんとするには、之またそれ丈の學問が入用なので、所詮算盤と裁縫のみでは其目的は達し得られぬことである。世に

英雄豪傑の生ずるのも自然の結果ではある樣だが、母の家庭に於ける敎育の素養が大に關係を持つことは、古今の歷史に明瞭である。藤原子の目的が、女子をして賢妻良母たらしむるのでなくして、女子は徒に男子に屈從すべからず、獨立自營をなすべし。と云ふにあらば、之も一種の意見であるが、男女兩性の成立より考ふるも、又多くの學者の說によるも、自ら其仕事に別がありて、男子は外面に當りて事務を辨し、女子は內を治めて良人をして內顧の憂なからしむるにあると云ふ事が眞理らしいのであるから、初より獨立自營と云ふ事を目的にするは、間違ている。併し世の中は理屈通りには行かぬ、或は良夫に夭逝せらるゝとか、又今日は生存競爭の激しき時代であるから、資產の點或は容貌の上杯よりして、相當の配偶を得られぬ場合もあるべく、實際は獨立自營の事も必要であるが、それとても、女子の仕事を裁縫や算盤と限ると云ふは、婦女子を見下げた話である。是迄の考では、女子の職業と云へば、遊藝でなければ賤しき髪結とか裁縫とかに止められたものであるが、人間全體の上から云つても、漸次生活の程度を高め品位を高尙にすると云ふが、社會の目的であるから、女子の職業に就いて大に改良をなし、新領地を開拓せなければならぬと思ふ。今日男子のなしつゝある仕事で、女子に出來る否寧ろ女子の方に適當の仕事が澤山ある。で、獨立自營を目的とするとしても、裁縫や算盤だけではいかぬ。大に學問をなすの必要がある。藤原子の說は是に於いてか、吾輩は感服することが出來ぬのである。藤原子以外の記者の意見は、ドウであるか窺ひたいものである。

菊地芳樹子孃に答ふ

女鑑月次和歌撰者

女鑑月次和歌の撰に就いて、論らはれしはさる事なれど、諺に十人寄れば十種といへる如く、各好む所異れば一概にはいひがたし。たとへば、年々御歌所に集る勅題詠進の歌、數千萬の中にはすぐれたる歌にて、撰にもれたるもあるべし。其他新聞雜誌等にて募集せるもの、撰者がよしと定めたる歌にてもあしと思ふもあれど、そは撰者の隨意にて、他の人のかれこれいひたりとて詮なきわざなり。さて歌につきていはむには、第一よき趣向を得て、詞正しく調高くよみたらむをよしとす。さるを論者がよしといへる歌の中の『しら雪のかかると見しは磯山の松にむれゐる鶴にさりける」「わかの浦の松の葉こしのあしたつはよせてかへらぬ浪かとぞ見る」これらの歌趣向もおもしろからず、結句「鶴にさりける」などいへるは詞つまりていやしげなり。かゝる作例もあれど、鶴いかに大鳥なればとて、よし數羽むれゐるにもせよ、浪にも雲にも見まかふべくもあらず。吉野山の千本の櫻を雲と見しはさてもあるべし。されど、前にもいへるごとく、各好む所によりてよしあしは定るのみ。

論者は廿年余り歌道を研究したりといへれど、文中に誤りあり。「何人の撰びたまひて其よしあしを定めたまへるにやしらねど云々」とある此や文字は、かとあるべき格あり。また末文に「妾が思ふ所あしゝと思ひたまはゞ云々」とあり。こはあしといふべき格なり。かゝる誤りは、初學の輩もしりたらむを、そが心得もなくして 歌のよしあしを論らふは、かたはらいたきことならずや。

雜報

雲のうへ

●聖恩優渥　天皇陛下には曩に第八師團管下步兵第五聯隊雪中行軍隊の慘狀を聞召され、遭難者御慰問として、侍從武官宮本砲兵大佐を青森衞戍地に差遣はされ、同武官は、大命を畏こみて同地に出張し聖慮の程を傳達せしとは旣に記しぬ。かくて、兩陛下には、親しく其狀況を聞食され、戰死者同樣の御取扱あらせらるゝ御內旨なるやに承り及びしさへいと難有きことなるに、今又仄かに洩れ承る處によれば、故山口大隊長以下慘死を遂げたる各將校幷に下士一同に對し、不日夫々祭粢料を御下賜遊ばさるべき御沙汰あらせらるゝ由にて　宮內省にては、目下陸軍省と交渉中なりと。遭難者遺族はいふも更なり、聖恩の洪大なる誰かは感泣せざるべき。

●御救恤　一月三十一日臺灣宜蘭城內火炎の趣、憫然に思召され、天皇　皇后兩陛下より、罹災者御救恤として、去月二十一日金二百圓御下賜相成りたりとぞ。

●御乳人廢止　大磯なる鍋島侯の邸に御滯在中なる　迪宮殿下には、日増に御生長遊ばさるゝ趣なるが、今回岡侍醫局長、橋本博士、弘田博士等熟議の上、自今御乳人を廢し、全く牛乳のみを奉る事となり、兩名の御乳人は、お暇下されたりと。尚其の後、御乳變りし爲めにや、一時御熱三十八度五分と拜診され、御下痢の氣味もあらせられたれど、間もなく御平癒あらせられ、御咽喉部も最

早御全快にて目下何の御障りも無く、いと御すこやかに渡らせらるゝと承りぬ。いともめでたき極みにこそ。

●皇族講話會●●●●　去月二十二日の夜、帝室制度調査局樓上に於いて、皇族講話會を開かせられたるが、帝國憲法中財政の條章に付穗積博士は詳細なる講義をなし、又須知陸軍歩兵少佐は、近世陸戰上の三大要素なる項目に付き、種々の實例を擧げ陳述せられたる後、茶菓の饗應ありたりといふ。

●神宮避雷針建設●●●●●　伊勢兩神宮へ避雷針を建設するの議は、造神宮使廳よりの具申に係り、已に勅裁を經たる趣にて、近々建設に着手すべき筈なるが、該避雷針は、御正殿の御屋根へ直に建設する次第に非ずして、板垣御門外なる杉の大樹の頂上に建設する設計ある由。而して該建設擔當技師は、大阪電話交換局技手秋山竹二郎氏にして、建設の砌りは、神宮司廳より十文字禰宜横地權禰宜立會を爲す可く、又同建設の際御正殿を眼下に瞰下すは、畏れ多き次第ありとて、御正殿の周圍に雲形の布を繞らしまゐらす趣なり。今回避雷針建設の事は客年御修繕を加へまつりし内宮御正殿の御屋根に、畏き邊の思召より鍍金の銅板を葺くことありしより、扨こそ落雷を豫防せん爲め、此の議を具申するに至りたる次第なりと聞きぬ。

梅のかをり

●三輪田女史の家塾●●●●●●　女史の家塾は世評最も善く、つねに滿員にて、廣く世の求に應ずる能はざりしが、此度麹町區四番町十四番地へ千坪の地所を買入れ、舊來の家塾を擴張し、一種の學校となして三輪田女學校と名づけ、小數の人を撰びて入學を許し、校風的感化の工夫に由りて良妻賢母の素養を作らんとすと云ふ。あはれ、いまだしき寄宿舍に居らむより、こゝしき親戚に身を托さむよ

り、温乎たる女史の膝下に侍して、其薫陶を受くるこそよけれ。學則は二錢印紙を封入して求むれば送らるゝ事ならん。

●女子學藝講習會　女子教育の盛なると共に、之に對する各種の學校講習會等の設立せる事甚だ多く、而も朝にたちて夕にたをるゝの類少なからす。此度本誌家計簿記を講義せらるゝ磯部武者五郎氏主幹となり、東京神田三崎町三丁目一番地に女子學藝講習會を設け、一ヶ年を修業年限とし、普く碩學諸大家を聘し、通信教授の便法によりて、講義錄を發行し、之を講習せしめて以て、國家有爲の女子を養成せんとすと。蓋しその目的は務めて輕佻をさけ、貞節の偉風を進め、品性を高尚ならしめ、ことに、家庭を齋ふべき日常必須の學科に力を盡すにありといふ。なほ本會の特色といふべきは、高遠なる學理にはせず、實用的の學科を平易懇切にをしふると、その學費の少なき處なりとぞ。われ／＼は、本會の健全に發達すること、他の群少學校講習會等の比にあらざるを信す。

●目出度き一家　外つ國にはさることながら、吾國にはいとも珍かしき事こそあれ。そは、香川縣大川郡志度町を距る、八九町南の山麓に住む多田西樹（八十八才）妻トメ（八十六才）の老夫婦は、今度西樹の米壽を賀する爲め、親族一同を膝許に集めたるに、孫十九名曾孫廿四名ありたりとあむ。此西樹は、常に下男と共に早朝より鍬を負ひて田畑に出で、妻トメは、孫の世話の閑さへあれば針の手を止めずといふ。實に目出度一家なりといふべし。

●藍綬褒章授與　新潟縣佐渡郡赤泊村田邊九郎平氏は、多年公衆の利益を興し、成績著明なるをもて、去月廿二日内務省を經由して、藍綬褒章を

授與せられたりとぞ。

●本年の敎員檢定試驗　文部省にては、第十六回師範學校、中學校、高等女學校敎員檢定試驗を行ふよしにて、受驗者は三月末日までに地方廳に願書を差出すべく、而して三十三年の同豫備試驗に合格したるもの、又は豫備試驗を要せずして、直に本試驗を受けんとするものゝ願書は八月末日まで之を受理する由にて、豫備試驗を要せずして本試驗を受けんとするものに對する告示は、一週間以内文部省より發せらるべし。又、豫備試驗施行期は八月下旬、本試驗は十一月中旬頃より、文部省及び都下に在る直轄學校の各所に於て執行さるべしといへり。

●女子大學の蹴鞠　日本女子大學校に於いては、目下白井規矩郎戸川定宅二氏に托して、本邦古代の蹴鞠を研究中なるが改修の上、適當なれば女子の運動に應用すべしといふ。

●實用女禮　松岡止波子刀自と石井治兵衞翁との薫陶を受たる、中林梅子女史は、今回本郷眞砂町に實用女禮敎場を設立し、本月一日より授業を開始する由。

●新式鳴物入の體操　小石川の女子大學校に於いて體操の一に加へたる新式體操は、英國の發明に係るものにて、これまで使用しつゝありし彼の球桿の兩端にある玉を取り、其の跡へ差渡し八分ばかりの鈴を附けたるものにて、これを振り廻はす毎に鈴の鳴る仕かけにして、振方に一定の規律あり一々ピヤノに合せつゝ振り分くるものなれば、幾十人にて振るも、ピヤノと相應じて美しき音を發し、十分體操に趣味を有たせるやうにせしもの也とぞ。また米國最近の發明に係る、ベル付啞鈴も、近日見本一組を輸入し、女子大學校生徒

の體操に課する由あるが、この啞鈴の拵へ方は、普通啞鈴の一方の玉をば鈴となしありて、中央の握りに、一つのポイントありて、其のポイントを押す時は鈴の鳴る仕掛となり、其音に大小の別ある爲め、八人を以て一組となし、ピヤノに合はせ、極小ひさき音をピヤノより出し、啞鈴の音と相和すべきものにて、十六人二十四人三十二人と順次八人宛、幾組ともなり、人の多くなるだけそれだけ音響も大きくなり、益々趣味の加はる仕掛あるがこの啞鈴は、運賃其の他にて學校着まで、一組の價格三十六圓ばかりなりといへり。

●古代雛　ひねりやの要屋と好古家の清水晴風氏とは、今回協議して雛の祖先の天兒はうこと伽はうことを組ませて、古代雛を作り出したりとつ元より物好きのことにて商賣そッち退けの業ながら、古歌抔に傳へし面影を面りに見るは、面白きふしあきに非ず。天兒はうこは、古へ大秡に用ゐし形代とて、絹にて作れる人形首に十字の手足を附けし裸體にて、立雛の内裏の帶束脱かせしさまと思はれぬ。古へは家に小兒の生るゝ時は、必らず之を作り、神佛に祈りて其兒の災厄をこの人形に負はす、それ故着衣は、必ず小兒と同じものを用ゐき。また伽はうこは、天兒はうこの進化せしものにて、頭には練糸の髪を植ゑ、軀體は白き絹にて作れるお猿枕に髣髴して、正しく女子を形りたるなり。されば、此伽はうこを天兒はうこに組合はせて、一對の雛としたる趣向、好事の眼には面白く見ゆるならむ。

八しまのほか

●婦人記者排斥運動　ちかごろ倫敦の男子新聞

記者には、盛んに婦人新聞記者排斥運動の行はれ居る由。現にクロニクル新聞社の如きは、男子新聞記者等同盟し、社主に迫りて婦人記者の俸給を三分の一に減ぜんことを要求して、遂に成功したりとなん。其他の新聞社には、社主に迫りて、婦人記者を盡く解雇せられたしと迄、要求し居るものさへありと云ふ。而して、此等婦人記者の多くは米人にして、其擔任の業務に對しては、男子に優る事多かり。殊に目下、其數益増加せんとする傾きあるが爲めに、反對運動起れるものなりといふ。

●才能は遺傳性なりや　最近の遺傳説に反對する人の多くは、偉人の子に偉人を生ずると稀なりとの事を以てすれども、こは、遺傳説を否定するに足らずと云ひ、英國のガルトン博士は、ネーチユア雜誌に書を寄せて曰く、「遺傳説に反對する者は、父の才能の幾部分が、子に傳はるべきものなるかを知らざるあり。假りに、父は偉大なる才能を有するものなりとするも、其子は、第一に母の性質、第二に父方の宗祖の性質、第三に母方の宗祖の性質を通じたるものあらざる可からず。例へ、父は奈破翁の如き偉人ありとせよ、其宗祖は奈破翁よりも遙に劣りたる才能の人にして、中には、普通人より劣りたるもののあるべし。かくて、母は、無論奈破翁に劣りたる人なるべく、而も母の性質は、子に傳はること最も大なりとせば、奈破翁の子が、奈破翁の如き偉人たる能はざるは、見易きの理あり。こは、遺傳設を否定すべき證據に非ずして、却つて、之を承認すべき證據なり」といへりとぞ。

●珍しき長命の系統　英國リースター伯の家は、珍らしき長命の系統を有し、伯の父は、千七百

五十二年、即ち今をさる百五十年前に生れたる人ありしとか。伯の健康はなは多くの壽命を保ち得べく、父子二人にて百五十餘年の長命を保つは、稀有の事なるべしと云ふ。

●空中無線電話の發明　巴里の空中航行協會大會に於いて、會員ノオンヴィーユは、同國人ヂエリレテーの發明に係る空中無線電話器械の説明を爲したる由あるが、此器械は、空中に上りたる輕氣球には、空中航中より無線にて電話を通ずるに供するものにして、若し、此器械をエイフエル塔に据付くるときは、空中航行者に向ひて、自在に通信を爲し得べしと。

●切手聚集者　郵便古切手を聚集する人に、面白き小説的の話あり。そは華盛頓のオッテンバーグと云ふ婦人にて、巨多の郵便古切手を聚集せんが爲めに、米國駐在の各國領事に書を送りて、各自國の切手を寄贈せんことを乞へり。其内西班牙領事のペルリネルと云ふは、切手を郵書に封じて送りたるが、夫れより互に往來して親密の間柄となり、終に此程結婚したりといへり。

●氷點以下二百度にて凝結せざる液　佛蘭西の理學會員、アルシーヌ、ダルソンヴアル博士は、水點下二百度に於いて凝結せざる液、即ち從來の記錄に存せざる最低温度を保ち得る液を發見したるが、此液は、普通の石油より得らるゝものにして博士は之を石油イーザーと稱し、化學上の研究には、極めて必要なるのみならず、之に依りて、極めて完全なる寒暖計を造り得べく、又此液を以て夏日室內を冷すことを得べしとぞ。

●カーネギーの妻　此ごろ、英國のさる記者が夫人をおとなひけるとき、徐に語りけらく、アメリカの新誌すら、おのれに關して少しも載せたる

ことはあらじ。かく、英國にても記さるゝことなきを望みつれば、若し强ひて何事をか語られよと宣へば、やむなく名高き人の無名の妻なりと答へむと、この時傍にありて、靜かにその話を聞き居たる夫は、忽ち詞を發して、荊妻は無名なれども、家事においてはよろづゆき屆きて、おのれ內顧のうれひなく、かつは慰籍し奮勵せしむ。實に幕中の權力なりと述べたりとぞ。あはれ、いたづらに功名富貴を求むる人の多き世に、ひとり本分を盡して實行をおさむるこの夫人のごときは類ひまれなる心ばえにて、誠に以て婦人の標本たるに足らむ。

●**共同臺所**　婢女の拂底は、我國にても甚だしき不便を感じつゝあるが、こゝに工業最も盛にして女工需要頗る多き米國に於いては、家々の主婦、者この問題に頭を惱さゞるものなかりき。之がため、アイオワ州シオックス市及そのあたりの主婦等は、別に婢女を雇はずして愉快に暮す新案をかんがへ出し、そを實行して善良なる成績を得たりとなん。さて其方法は、數多の主婦等共同して一の組合を作り、各金をいだしてその道にくらからぬ料理人を雇ひ、新に適當なる家を借り受け、ここにこぞりて毎日一切の食物を調製せしめ、その獻立は、各家の主婦代る〴〵之を定むることなるが、爲に、さま〴〵風味の異なる食物を味ひ得るの利益を受くるのみならず、婢女の給金、薪炭費等をも省きえて、大に儉約になるといへり。我國の主婦達も、此方法を試みられなば、いとおもしろきこととなるべし。

●**有妻者は長命**　獨逸の統計大家フィルッ博士は、多年の間材料を集めたる結果、結婚したる人は、獨身者より一般に長命なることを知り得た

り。即ち氏の作れる統計表によれば、年齢三十歳より七十歳迄の既婚者の死亡數は、同年齢の獨身者の死亡數より少きこと五分の三にして、三十一歳を經過したる獨身者の平均年齢は、五十八歳と十分の六なれども、既婚者は六十四歳と十分の四なりと。

●新婦の持參金　吾劇に見ゆる如き話あるが獨逸のゲーニッヒクラッツに住するドウハシエッツと云ふ人は此程己れの娘を他家へ嫁せしむるに就き娘の體量と同量の銀貨を持參金として新郎に贈ることに決し結婚の當日式を擧ぐる前來客の面前にて娘の體量を測り其體量は六十二基（瓦凡そ十七貫）なりしかば之に相當する銀貨即ち三萬三千七百五十圓を贈りたる由なり。

▲落葉籠は紙面の都合に依り休載

●口繪について

●女子高等師範學校教諭後閑菊野子刀自

あしたは此處に轉任し、夕は彼處に移動するが如きは、後進を薫陶するの道にあらじ。而もその裏面には、いかなる卑劣手段の伏在するかも測り知るべからず。誠に以て敎育家の取るべき態度にあらざる也。

刀自は、舊姫路の藩士後閑彌平次の第三女にして、同藩士現時東京府士族後閑政氏の妻なり。慶應二年東京麴町區大手町に生れ、維新の際姫路に移住す。幼にして鋭敏、姫路小學校に於いて、讀書及び習字を學びて、令聞また高かりき。明治八年東京府下に寄留し、翌年二月、東京師範學校附屬小學校に入り、ますます進んでその全科を了り、豫備科を經て同十七年二月女子師範學校を卒業し

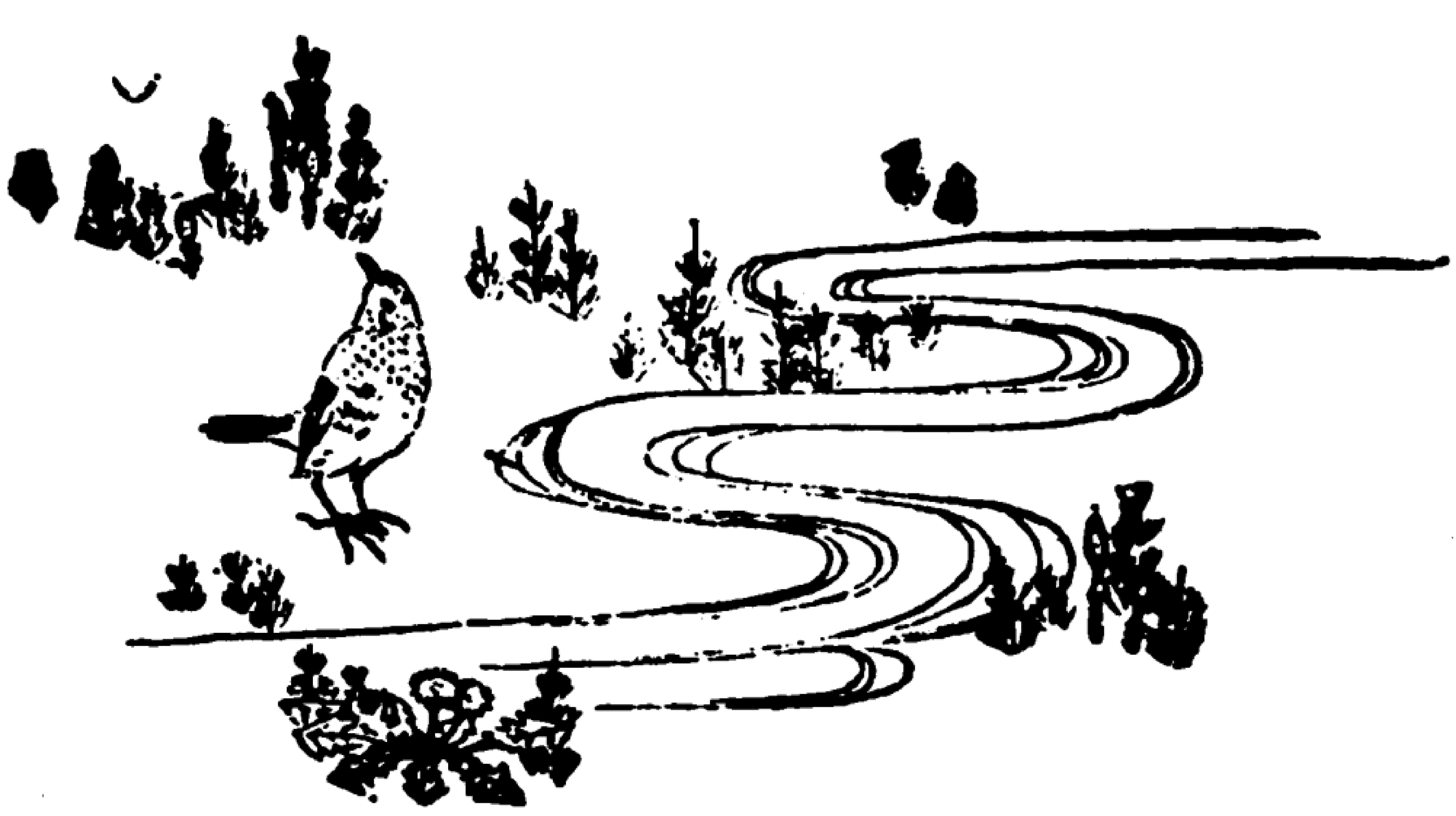
ぬ。やがて同校訓導に任せられ、ついで女子高等師範學校助敎諭となり、廿八年敎諭に榮進し、卅四年正七位に敍せらる。現に同校敎諭として、修身、作法、家事、衞生、國語等の學科を敎授す。この間、文部省敎員檢定委員を命せらるゝこと實に十二回の多きに達し、コロンブス世界大博覽會出品審査委員を命せらるゝこと一回、其他、あまたの婦人會に關係し、また文法等種々の著述少なからず。刀自の職を同校に奉ずること殆ど廿年、その感化を受けて賢母良妻のほまれあるもの、擧げて數ふべからず。今なほ德風を慕はざるはなしと云ふ。刀自の師範科を終るや、父彌平次の養子政氏と結婚して二男三女を設け、こゝに樂しき家庭を作りぬ。外に出でゝは、專心公職に從ひ、内にありては、また巧に家を理め、婢女はさらなり、稚なき令息令孃といへども、決して禮を失ふことなし。内外事にたづさはりて、精勵熱心よくその中庸を得、まことに偉なりといふべし。

●●●●●●●●●

●東京女學館講師秦りん子刀自　刀自は東京淺草の人なり。幼にして、御茶水なる女子高等師範學校附屬小學校に入學し、更に高等女學校を卒業し、なほ進むで女子高等師範學校に入る。常に級中の首部を占め、賞與を受くること多かりき。明治三十年三月良好なる成績を以て全科の業を終へぬ。かくて同年盛岡高等女學校に赴任し、專ら子女の敎育に從事せしが、未だ創立の際にて萬事整はず。さなきだに東北の習ひとて、女子敎育の不振甚だしきものから、刀自の斡旋大に力ありて、漸く進歩の氣運に向ひぬ。こゝに居ること二年。故ありて職を辭して東京に歸る。明治卅二年東京女學館講師に聘せられ、爾來今日に至るまで、熱心着實、敎育に身を委ね、訓誨懇切の聞えありとぞ。

●國光社印刷部工場の内部●●●●●●●●●　卷頭にかゝげたる同工場の内部は、現にわが女鑑を印刷する所なり。去年九月業務を擴張せし以來、數十臺の器械を据附けことに獨逸より、尤も斬新ある瓦斯發動器を購入し熟練の職工を増加し工場略整備せり。卷首の寫眞は單に其就業中の一端を示せしものなり。

●梅花の兩勝境●●●●●●　月瀬は大和國添上郡に屬し吉野の櫻花と共に海内無双の名あり、暗香疎影の好時季は本月十日頃ならんと云ふ、關西鐵道上野大河原の兩停車場よりするを順路とす。偕樂園は水戸市上市の西端にあり、水戸烈公が好文亭を營みし處にして萬株の梅花皆遺愛の甘棠ならざるはなし、花の見頃は本月中旬なるべきか、常磐線によれば朝に東京を發し園中にて晝食を爲し夕刻には歸京するを得るなり。



女鑑歌文月次兼題

三月廿日
歌　夜春雨　三月九日〆切
文　學校の樣子を問ひ合されしに答ふる文

四月五日
歌　行旅歎　三月廿四日〆切
文　花見日記

四月廿日
歌　月前花　二月九日〆切
文　菫の花を友に送る文

五月五日
歌　鏡　四月廿四日〆切
文　暮春の感

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
………………
………………
………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。
……。……、……。
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○天地人を取りし人には賞品を呈す。

肝付海軍少將題辭　木村海軍大尉校閲
小笠原海軍大佐序文及作歌　西　圭一
伊東海軍大將手翰　野本衛佐美　合著

訂正第三版

新案
海軍遊戲法

菊版美本
詳圖入
全一冊

定價金貳拾錢
郵税金四錢

（一）日本は海國なり故に兒童の時より海軍思想を養成せざる可らず
（二）兒童は身体發達の旺盛なる時期なり故に最体育に重きを措かざる可らず
（三）兒童は興味を感ずる事甚しきものなり故に機に應して其快楽を正情に導かざる可らず

本書は右三者の目的を達する一助として著者が多年或は兵書に徴し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて裘葛を費し漸編成したるものなり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神忽ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に駕し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かざる刮目企足して俟つべきなり、世の教育家父兄諸士の猛省を促す、

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社國光社出版部
發賣元

●わきが（腋臭症）根治確證藥の新發見！

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**することと確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局にて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

專賣　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**（電話本局二二五四六）

●慢性胃病患者に告ぐ

慢性胃病に罹り醫療及賣藥を施すも只だ一時凌ぎのみにて根治の見込なく到底不治の難症と斷念せる如き患者あらば最終の試藥として當店專賣の**胃病根治劑**一週分（藥價送料共四拾錢）を服用し見よ忽ち卓絕せる奇効を顯はし大に輕快に趣くことを確證す已に一週分にて藥効を覺りし諸君は引續て三週分（藥價送料共壹圓貳拾錢）を用ゆれば如何なる頑固の慢性胃病にても誓て根治することを確證す、但し最初の試服者へは一週分以上は決して販賣せず故に一週分にして藥効を感せざる患者は斷然廢藥し續て服用すること勿れ、是れ當店は他の賣藥者流の如く患者を欺かざる證據なり……乞ふ他の藥療にて治せざる患者は兎に角僅か四拾錢を投じて只一度だけ試み見よ必ず誓て根治せしむ

東京市神田區五軒町拾九番地

專賣　**日新館藥房**（電話本局二二五四六）

明治廿五年二月十二日第三種郵便物認可
毎月二回五日廿日發行第貳百四拾八號
明治三十五年三月五日發行

東京築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷